

いたづらもの

「なアに別段、どこへも行きませんが、家を出された廣行、もう再び乗る機会もありませ  
ンから幸ひ、御迷惑でも一時間か三十分ほど、乗り終りに乗って見たいですよ、人間と  
いふものは意地の悪い妙なものでね、食へないと思へば猶更ら食ひたいのと同じこつた  
は、は、は、は、」

かう言ひ出した以上、もし嫌といへば、それ以上に必ず難題を持ち出す男、まして今は廢  
嫡の身に心も癖めば、うかく跳ね付けられぬ相手、今日の災難と諦めて、

「實は我々、すぐに歸りますから、どうか二三分で」

「ありがたう、二三分で結構です、しかし運轉手の顔を知らないから、甚だ相濟まない  
御苦勞ですが、自働車のあるところまで」

どうしても免れぬ場合、しぶく二人とも後へ戻りて、待ち受けし運轉手に向ひ、

「この方を二三十分、乗せてくれ、そして濟めばやはり此處へ来て待つて居るんだぜ、ち

ヤア松川さん、御遠慮なく」

「や、失敬、暫く拜借します」

二人の立去りした後、まづ運轉手に三圓を掴ませて、其まゝいづれへか行きしが、やがて伴  
ひ來りしは職人體の酔ッ拂ひ三人、加之も最も見苦しき襦袢半纏に破れ股引の垢染みし眞  
ッ黒な奴を三人、

「おい、この三人を乗せてね、乃公も乗るが外へ行くに及ばない、上野の入口から博物館  
の前まで同じ道を何遍も往ッたり來たりすれば宜いッだ、いやな顔するな、富豪や華族  
ばかり乗せて居ちやア冥加が悪い、をり／＼人を轢ッ殺すだらう、罪亡ぼした、さア三  
人とも遠慮なく大きな面して乗ッた、乃公が借切ッた自働車だ錢は入らないぞ、後で此  
方から飲料を遺るぞ」

あッと驚きし運轉手も今更ら三圓の祝儀を返しも出來ず、ぐづぐづすれば三人の酔ッ拂ひ  
いたづらもの

いたづらものを  
を唆して袋叩きに仕舞れまじき勢ひ、帽子を面深に半泣きの澁面を隠しながら、ハンドルを取れば空を走るが如し、

「どうだ三人とも、いゝ心持だらう」

「だゞ旦那ア、どうも堪りませんねエ、わツしなンかア常に自働車を眼の仇敵に思ツてるンですよ、不意に人を嚇しやアがツて、ぶうく臭エ尻を垂れて、しかし自分が乗ツて見ると、あんまり痛にも觸りませんねエ、おい兄弟、どうだい」

「おらア夢のやうだ、これで道の知れぬ遠くへ此まゝ持つて行かれりやア生贖でも取られるンだが、左の樹の間から不忍の池を見て右に花を見て、おツと博物館、逆戻り今度は反対だい、早いもんだなア、やア有象無象が驚いて居やアがるぜ、どんなもんでエ畜生、誰か知ツてる奴に逢ひてエなア」

「旦那ア、わツしやア今年三十六ですが、かういふ事があツちやアこれが馬鹿運の向き始

めで、四十の年までにやア家賃の滞られエ人間になるかも知れませんね、ありがてエ、もし山の神でも見やアがツたら氣絶するだらう」

「馬鹿運の向き始めなら宜いが、馬鹿運の向き仕舞ぢやア今夜、頓死するかも知れぬエゼ頓死でも、變死でも構はれぬ、この世に思ひ置く事さらに無しだ、もし死んだら石塔の眞正面の自働車に乗ツた事を彫込んでくれ、たのむぜ」

「しかし旦那ア、旦那ア全體、どこの御方様で居らツしやいますい、わツし等のやうなものを自働車に乗ツけて、花見をさして下さるたア」

「ばゝゝゝなかゝ面白連中だな、さアこれで往復十遍だから降りた降りた、降りてねまた代りに誰か引張ツて来い、乞食でも何でも構はない、もし乞食なら一人前に一圓づゝ遣るぞ、探して来い、探して来い」

子爵と男爵の二人、顔に時計を見ながら三十分の後に來て見れば、四人の乞食を乗せて上

いたづらもの

いたづらもの

野の入口より博物館の前まで同じ一筋の道を往つたり來たり、その兩側には黒山の如き見物の人垣、そら來た、また來たと前を通る毎に百雷の如き拍子喝采、わっわっといふ大騒動、

開いた口が塞がらぬとは實に此事なり、

四人の乞食を自働車に乗せて上野満山の花見客を驚かし、あまりの事に怒りも得せず呆れ果てし二人に失敬の一語を残して、くつくくと笑ひながら其まゝ飄然と立歸りし廣行、妻の前には澄ました顔、

「今日は少々、いつもより運動を仕過ぎて遅くなつた、あゝ草臥れた」

「遅くなつたでは御坐いませんよ、今日に限つて、まア何といふ折の悪い事、良人、お父

様か」

「え、父が、來られたのか」

「有難い事で御坐いますねエ、わざと良人、かういふところへ、過日、上野で御意を得まして、まだ一週間も立ちませんに」

「やはり親だね、第一、汝が、よほど氣に入つたらしいが、來られるにしても、いろく屋敷の者どもへ氣兼ねせられたらうに、お傳でか」

「いゝえ、その邊までは、お傳に召して入らしつたさうで御坐いますが、御徒歩で、妾はたゞもう涙ばかり出まして」

「何か、さし上げたかれ」

「別に何も入らない、茶の心得はあるかと仰せられました」

「そりア宜かつた、お父様より汝のために何より宜かつた、汝には一番の藝だから、父

いたづらもの

いたづらもの

も茶人だ、無論お譽めに預つたらう」

「はい、そして良人の事を、委しう、お聞き遊ばしましたよ、妾も、なまじい繕うては却つて宜しくないと思つたから何事も隠さず、ありのままに申し上げました、お湯殿で獨相撲の事を良人、横になつて、お笑ひで御坐いました」

「は、馬鹿な、つまらない事を汝、はッはッはッ、何といはれた、呵しくて堪らない時は、すぐ横になられる癖があるんだよ、ば、ば、ば」

「しかし良人、勿體なう御坐いますよ、よく良人を御存じで居らッしやいますよ、廣行は家を嗣がすよりも家を出した方が本人のためになる、成敗は兎も角、大きいところのあゝる奴ぢやと」

「む、さうか、や、それで安心した、そこまで乃公を見て居て下さりやア、實に乃公も本望だ」

「そしてね、そして妾に」

「汝に何と、いはれた」

「これだけは、申し上げません」

「おい、乃公に、いへない事があるか、何か父が汝に」

「ほ、ほ、ほ」

「は、ア、わかッた」

「わかれば、あて、御覽あそばせ」

「いや、わかッたが乃公の方もいはない」

「では妾から申します、お父様が、妾に、ほ、ほ、やはり止しませう」

「やはり止す、急にいへないほど、好い事と見えるな」

「好い事では御坐いません、この事は良人も、お悪いのですもの」

いたづらもの

いたづらもの

「乃公が悪い、ますく變だな」

「だって良人、お父様が、妾に、なぜ子を生まぬかと」

「は、は、何だ、そんな事か、なるほど半分は乃公も悪いね、は、は、は、」

### 其十九

廢嫡以來、番町の我屋敷へは影も見せざれど、其後こゝに始めて青山の西田家を訪ひし廣行、主人の伯爵と奥の一室に差對ひながら、

「いろくくと有難う御坐いました、その後お禮かたぐは是非、伺はねばならない筈ですが、却つて御迷惑と心得、わざと差控へて居りました、また月々お届け下さいまして」

「いや、此方からも一度、訪れたいと思つて居ましたがね、つい御無沙汰をして、しかし、どうですな、屋敷に居られる時よりは萬事、氣樂でせう」

「氣樂か何か、兎も角、かういふ身輕の境涯が分相應で、よほど自分の性に合つてるやうです、どう考へても華族に生れたのが、生れ損ひで、大間違ひだつたらしう思ひます、は、は、は、」

「なるほど、廣行さんの氣では、さうだらう、ところで毎日、何を仕て居られる」  
「ぶら／＼遊んで居ります」

「たゞ遊んでも居れまいに、書物でも讀んで」  
「本は讀みます、勉強といふやうな、つまらない不自然な事は第一に馬鹿げて居るのみならず、うか／＼すると知らず識らず學者になる恐れがありますから、なるべく氣を付けて學問の中毒しないやう、つまり肩の凝らない程度に讀んで居ります、は、は、は、」

「相變らず皮肉だ、皮肉といへば、聞きましたぞ、この春、上野で、乞食を自動車に乗せて花見を仕られたさうですな、は、は、は、その大井が来て、いやはや、呆れ返るより寧ろいたづらもの」

いたづらもの

恐れ入ッて居た、は、は、は、」  
 「あの二人は馬鹿ですよ、あゝいふ没理漢が華族にあるから華族の評判が善くない、外の  
 時と違ッて一年一度の花でせう、この花を観たいため夜も晝も砂埃の汗水に働いて、今  
 日ばかりを生命の洗濯に人生無上の快樂を極めてる中へ、自己の力でもなく生れながら  
 人生特殊の境遇を持つた奴が、ぶう／＼臭い煙を吐いて自動車で乗り込むとは、衆と共に  
 楽しむべき場處がらを辨へざる暴慢無禮で、けしからん振舞ですな。彼等ア上野に何  
 の用がありましたか、いかなる大切の急務がありましたらう、もし風流の點から論じても、  
 何事ぞ花見る人の長刀で、今日の自動車ほど花に配合の悪い不適當な厄介物はあります  
 まい、第一は花神に對しても恐れありだ、加之も彼等、をり／＼人を轢ッ殺したり怪我  
 をさしたりしますから、幸ひ乞食を乗せて平生の罪亡ぼしを行はせてヤツタンです、  
 それを不足いふとは言語道斷な奴、まだ乞食を乗せたまゝ、屋敷へ送り込まなかつたのが

彼等の僥倖ですよ、はッはッはッ」

子爵家の相續人たりし今までは違ッて、何物にも憚らざる傍若無人、そろ／＼本領の一  
 端を現はしかけし意氣軒昂、逆も當るべからざる勢ひに、流石の西田伯も聊か恐れ氣味の  
 眞正面より、隙もあらせず斬込みし廣行、

「しかし他の事は置きませう、これから廣行お願いが御坐います、甚だ突然ですが、どう  
 か三千圓、お貸し下さりますまいか」

「三千圓、よろしいとも、つまり六萬圓は預ッてあるのですから」

「いや、別に三千圓、御當家から拜借いたしたい、あの六萬圓は生活の基本金として、親  
 戚協議の上お預け申したので目下の境遇に應じた月々の利子を頂戴する外、一文たりと  
 も手は著けません、また手を著くべき性質でなく、もし廣行が其内の幾何かと願へば、  
 お叱りを蒙る筈の金と心得ますから、どうか、お手許の三千圓」

いたづらもの

いたづらもの

「いかにも、その點は悪かつた、ところで三千圓、何に入用です」

「願はくば只、何の御言葉もない金だけの三千圓を拜借いたしたい、たゞ廣行に三千圓お貸し下されたい、もし費途を委しう聞かれた上で貸してやらうといふ思召ならば、それを聞かずに斷然、おことわり下さい」

六萬圓に就て既に一本、まぬられた上の三千圓、加之も以前の廣行よりは何となく勢ひの異なる點に打たれし西田伯、

「よろしい、よろしい、三千圓」

「有難う御坐います、今年の十月には、必ず御返濟いたしますから」

「なアに十月と限つた事はない、もし都合が悪ければ其まゝでも差支ありませんよ」

「只今が五月、や、相違なく十月に持参いたします、わづか三千五千の金で一日たりとも返濟の期限を間違つては廣行、あまり自分ながら小さ過ぎて生涯の計算上、よほどの損

になります、同じ間違ふくらゐならば、せめて五十萬とか百萬とか、それにしても金だけでは、少々、惜しいやうな氣がして、間違ひ兼ねますなア」

いたづらもの

車輪に注ぐ一滴の油は恐るべき大運轉の原動力となるべく、衣食住の生活以外、嗜好物の費用以外、この三千圓を隻手に握れる松川廣行、物凄き冷笑を浮かべながら、いよゝゝ何等かの期するところありて、或意味に於ける流血淋漓の戰場、その激烈なる活社會の中央へ飛び出ださむとす、

金は僅に三千圓なれど、彼の頭腦を以ての三千圓、彼の大膽を以ての三千圓、彼の奇才縦横を以ての三千圓、彼の動かすべからざる主義と本領を以ての三千圓、そもゝゝいかなる三千圓の價值ありや、そもゝゝいかなる購買物を得べきや、

一家三四人、贅澤さへせずば、これで衣食住の顧慮なき六萬圓の生活費を鼻糞とも思はざる廣行、他人の眼よりは泥溝へ捨てるか川へ叩き込むか費途の分らぬ三千圓を出陣の武具として、いよく活社會の戰場に突貫せむとするところ、正に本人の本領を遺憾なく顯はしぬ、

されど家に歸れば例の調子、最愛の妻が手料理に夕飯の舌鼓を打ちながら、

「ねエ、おい、世の中ア何故、かう馬鹿が多いだらう、氣狂ひ馬の尻ツへたを鞭で叩かれらやうに晝も夜も走り廻ッてるかと思へば、案外つまらない事に暇を潰す奴ばかりだ、過日から電車へ乗ると電車用語の懸賞に、端の方へ込合ッては互の迷惑だから、中程へ這入ッてくれといふ事の募集だが、募集の結果（どうぞ中程へ願ひます）これが當ッた

さうだ、ところが（どうぞ中程へ願ひます）といふのもあつたので（どうぞ）と（どうぞ）の撰擇を、博士連中の研究に上したといふコツた、日本國體として外國人に對する用語でもなしさ、また文法の講釋でも語法の議論でもないに、はッはッはッ、しかし世間には垢ぬけのした面白い奴があるよ、この募集中にね、かういふ洒落れたのがあつたさうだ（中程に美人が居ります）いかにも痛快だね、人を馬鹿にしてるが、たしかに今日の卑劣な人情を穿ち得て妙だ、もし乃公なら更に一步を進めて（中程に金が落ちてあります）どうだね、は、は、は、車掌この一聲を出せば、兩端に混合ッた人間、ぞろ／＼と一時に中へ押込むぜ、また各で臆病だ膽ツ玉の小さい今日の人間だから（兩端に攫徒が居ります）これでも汝、慌て、懷中を押へたま、一時に中央へ混合ふぜ、しかし兩端に居る人間が怒るだらう、は、は、は、は、は、は、

笑ひながら無遠慮の大口を開いて、凡そ世間普通の比較に三人前の常食、膽玉のみならず



いたづらもの  
胃袋も人並よりは勝れて大きい男なり、



いたづらもの (續篇)

貧乏と苦勞が嫌で堪らぬといふものあれど、これは華族が嫌で堪らいふぬと松川廣行、かせいでも働いても生活難の今日、手腕があつても學問があつても就職難の今日、いかに奮闘するも努力するも運命の神に憎まれては智恵も工夫も用に立たざる今日、そもそも祖先以來の餘慶に寢て居て食へる華族が何のために嫌で面倒かといへば、その理由よりも

我この性質に於て只かくの如しとは、やはり世間に對して辯解の面倒を省き申譯の手續を嫌がる本人の捨言葉、強ひて問へば、蟲が好かぬと空を嘯く、顔色蒼ざめて十年の苦學に猶いまだ下宿料の催促を防ぎ兼ねたるもの、眼より今この松川廣行を見れば、つまり世間しらすの罰當りなり、あたらし學士の肩書に卵子の折函を添へて走り廻るもの、眼より今この松川廣行を見れば、つまり大名種に生れし我ま、育ちの好奇心なり、さらに同族の朋友間より今この松川廣行を見れば、みづから進んで廢嫡せられし狂氣沙汰、加之も子爵の名譽と財産とを一人の女に振代へし馬鹿者なり、されど本人の廣行、ふんと鼻の頭に軽く笑うて曰く、醫者は死體の解剖すれど、生きた乃公が、彼奴等のために解剖されて堪るものかと、

いたづらもの

いたづらもの

松川家は子爵中の第一、全華族を通じても恐らく五本の指に數へらるゝ富を有して、堂々たる練塀に圍まれ魏々たる和洋折衷に築かれたる中六番町の屋敷も、我より進んで廢嫡を迫りし廣行の心には、今この上野の森影に借屋住居の簡易生活、いかに人生の趣味深きで、殆ど一種の囚はれより脱れ出でたるが如く、いち／＼出入の大支關に送迎せられて道路に制限ある馬車や自働車に運ばるゝよりも、いたるところ自由自在に二本の健脚、もし勞れし時は四通八道の電車あり辻傳あり、家に歸れば不自然に平蜘蛛の眞似をする三太夫の面ではなく、生涯を我ために捧げし最愛の妻が笑顔に迎へられて、夕飯の膳の上に眞心を籠めし手料理の一品二品、おもはず舌鼓を打ちながら誰憚らぬ談笑の境涯、いかに面白く樂しきぞ、

されど只これ一時の假住居に我身の置きどころ、きのふに勝る今日の趣味と快樂のみ、松川廣行、もし此まゝの境涯に甘んじて此まゝの快樂に終れば、いはゆる醉生夢死の徒、

たゞ華族の息子が我まゝに家を飛び出して好いた女と其日其日を暮らすのみの事、昔は風流の若隱居、今日は戀愛小説の口繪に等しけれど、この廣行が華族の門を出で、赤裸々の一平民となりしには、社會に對する存在の意味上、その平民となるだけの主義あり本領あり覺悟あり、加之も風流の若隱居とし戀愛小説の口繪としては、容貌性格、あまりに不似合なる大膽の細心と驚くべき案外の奇策縱横とを備へて、世の中の戰場に武者振ひの勢ひまた餘りに鮮明すぎたる男、いづれにせよ、うき世を忍ぶ戀の宿かと思はるゝ今の境涯はこの松川廣行を容るゝに狭く小さく頗る不調和の背景なり、

たゞ廣行がために生涯を通じて遺憾なく調和せるものは、妻として良人に冊く朝夕のキタ女のみ、

名畫より脱け出でたるが如き天生の容色品位、たとひ其まゝ華族の夫人としても、つゝまやかに身を持ちて晴がましき虚榮に憧れぬ自然の性質、今この境涯に世話女房としても、

いたづらもの

いたづらもの

いぢらしく哀れげの中に雄々しきところありて物に動かぬ點は、もしや不幸の運命に落ち果てし曉その艱苦に伴ふ貞女の妻としても、

そもや十九の年より過ぎて還らぬ二十六の昨日まで、あたら花の色香を惜しまるゝ世間の春にも見せず、日蔭の埋れ木に捨て置かれし時さへ、をりく通ひ來ませる君の姿を女一代の冥加として、世の一口に賤しき妾といへど、我は妻ある人に弄ばるゝ身でなく、妻なき人の戀に靡きし身、情は猶更ら名のみの冷き夫婦よりも暖に、いづこの誰をか羨むべきいづこの誰に恥づべきぞ、此まゝの生涯を世に交はらずとも、君たゞ一人を萬人の力草とせしキタ女、まして今は晴れて妻と呼ばれ良人と呼ぶキタ女、月も花も廣行たゞ一人に宿せり、戀も情も廣行たゞ一人に盡せり、身に飾る珠玉の光りも、世に競ふ榮華の誇りも、廣行たゞ一人に代へ難し、このキタ女に良人とせらるゝ松川廣行は、社會に向うて志はまだ達せず力いまだ伸びざる

も天下幾萬の家庭に人しれぬ悲惨を含める今日、妻として理想の妻は既に得たり、

いたづらもの

萬事に重々しき極彩色の華族より脱し來りて、家風も形式もない上野の森影に閑靜なる初音町の假住居、老少の下女二人に夫婦たゞ二人の主従四人、親戚に保管せらるゝ六萬圓の五分利三千圓を月々二百五十圓づゝの生活費に當てゝ、春の花も秋の月も居ながらに見る氣樂さ、葉越しに漏れ來る夏の涼風を午睡の手枕に通はせ、樹々の梢に積る冬の雪を寒からぬ置炬燵に眺めて、浮世の萬人に誇るべき才色兩全の妻を持ち、おのが心のまゝなる書を読み身を養ひ、誰に憚らす物に煩はされず天地たゞ我物の境涯、これでは以上の希望さへなくば、松川廣行もはや人生に何の不足もなし、されど今この境涯を殆ど一種の化石視して、人生に無意味とせる廣行がためには、やがて

いたづらもの

蒼空へ飛ぶべき羽翼を休めて暫し假寢の境なり、

## 其 一

春の夕ぐれ、古風に花ちる入相の鐘の音は、芝の山内と今この上野に残りて、ぶらくくと例のステツキを引き摺りながら歸り來れる廣行、

このステツキを引き摺る音と、こつ／＼門口の敷石を二三度、軽く無心に叩く癖とは、人しれぬ戀に忍び來りし時も、外に家なくて歸り來る今も、待ち兼ねし身は、微妙の音楽、はや入口の障子を開けて、飛び立つ心を靜に迎へ出るキタ女、ことし二十六といへど、知らぬものゝ眼には二十一二、いかに近寄りても三か四か、もし當世風の香粉に歲月を偷み取る人爲的の裝飾を施せば、すぎし十九の昔も今も同じ美の神に包まれて、くつきりと冴え渡る肉色の頬に堪へられぬ微笑を浮べ、わざと作らず聊か太く濃き眉に却つて卑しから

ぬ自然の品位、いき／＼と張り切る目元に得もいはれぬ愛嬌の類越、これで藝妓ならば絶えず年中の殺人罪なり、

「お歸り遊ばせ」

廣行、無言に首肯いて、隻手に取りし帽子を渡しながら、すつと其まゝ二階へ上れば、糸に引かるゝ如く續いて妻のキタ女、

上りて三疊、襖越に六疊あれど、八疊の座敷を晝は書齋に夜は臥房の境涯、寧ろ暢氣に打寛いで、床柱を背に當てし大胡坐、歸れば例となれる妻の手前に薄茶一椀、ぐつと一息の無雜作に飲み乾して、

「も少し早く歸らうと思ツたが、青山へ廻つて遅くなツたよ」

「青山、あの西田様で御坐いますの」

「さうだよ、しかし人間の氣といふものは妙なものだれ、まだ廢嫡以來、さう長くもなら

いたづらもの

いたづらもの

行ないが儲、かうなツた今の境遇から行ツて見ると、大きな冠木門に伯爵といふ西田の表札が白痴おどしの眼を割いたやうで、何だか一種の滑稽じみて見えるぜ、はゝゝゝ兎も角も飯を食はしてくれ、腹が空いたよ、幸ひ夕食に近いから久しぶりで是非にと引き止めたがね、つまらない献立で嫌な奴に四角張ツた給仕しられるより、少々は不加減でもやはり汝の手料理が美味いね乃公には、腹が空いた腹が空いた、べこゝくだ」

「はゝゝゝ只今、すぐに差上げますが、外様と違ひ、第一の御親戚でもあり、また月々の事お世話を下さる方ですもの、折角さう仰しやるのを良人のやうに、御自身ばかりの御勝手で、さう無愛想になさるもんで御坐いませんよ、御馳走になツて入らツしやれば宜しいに、無理に私の不加減を召上らずとも」

「や、とんだところで、やられた、決して不加減ぢやアない、有難く頂戴するから早く出してくれ、贅澤は無論いはないが、けふは何だ」

「お晝飯に三品も差上げましたでせう」

「晝の事ぢやアないよ」

「ですから今夜は、一品で御辛抱あそばせ」

「するゝ、一品で辛抱するから早く頼む、しかし一品は何だらうね」

「御覽になれば、わかりますよ」

「御覽にならない先、ちよいと聞きたいよ」

「はゝゝゝまるで小兒のやうです事ね」

「英雄また時に兒戯を學ぶだ、人事一切の不自然を取ツて退けた汝の前では小兒だよ、この小兒よく保護をしてくれ、あまり遅いと泣き出すぞ」

「はゝゝゝどシな泣き聲で御坐いませう」

「わあッ」

いたづらもの

いたづらもの

いかに戯けても、いかに馬鹿げても、世間普通の人間、こゝまで調子外れの無遠慮に馬鹿げ得らるゝものでなし、まして床柱に背を寄せ兩腕を組んで真面目な顔に俄の大口を開きながら、

かゝる馬鹿々々しき事、門外一步の他人に對うては酔うても狂うても出来ぬ筈、心の底まで打解けて我身に許し給へばこそと、その呵しさよりは嬉しさの彌増すキタ女、

我前に運ばれし膳の上を、廣行ちらと見て、はや箸を隻手に隻手の飯茶碗を差出しぬ、

「はゝア、お手料理の一品、これかい、煎鳥だな」

「はゝゝゝたまには良人、さういふ一品の方が宜しう御坐いませう」

「宜しう御坐いますがね、こりやア煎鳥でなく煎午房と煎蒟蒻だぜ、どこへ遁げたか鳥の所在が頗る不明瞭だ、よほど追窮しないと捕まらない」

「お晝飯に良人、さんざ鳥を召上ったでは御坐いませんか、その餘分ですもの」

「なるほど、よくいへば二度の勤めで、わるくいへば捨場に困った食ひ餘りの廢物利用だ

れ、段々と汝も、世帯人になつて来たよ、この分ぢやア、いくら乃公が貧乏しても大丈

夫だ、はゝゝゝしかし煎午房、なかゝゝ食へる、煎蒟蒻も、なかゝゝ美味い」

元來の大食、まして空腹の夕飯、饒舌りながら普通の三人前以上、これだけでも舊式の大

名華族を嗣ぐには不合格の男、そろゝ後で帯を弛め出す無作法に至つては、いよゝゝ金

屏風の殿様に不似合なり、

食後の帯を弛めし時、その懷中より摺み出だせしは、紙にも包まぬ裸の百圓紙幣三十枚、

妻の前に抛げ遣りながら、

「おい、それを仕舞ツて置いてくれ、三千圓あるよ」

「良人、此お金は」

「今日、青山の西田から借りて来たんだ」

いたづらもの

いたづらもの

「どうして御坐います」

「どうもしない、ちよいと入る事が出来たからさ、理由は後で話すが、今日その三千圓を借りるに就いて、よほど面白かつたよ、父の慈愛に賜はつた例の六萬圓を保管してゐられ、いづれ何か面倒な事を言ひ込んで来る乃公と思つて居たんだらう、早呑み込みにあの中の三千圓と心得て、すぐに承知したが、いや、あれは廢嫡の砌、親戚立會の上お預け申したもので目下の境遇に應じた月々の利子を頂戴する外、一文たりとも手を著けません、もし廣行が其中の幾何かと願へば當然お叱りを蒙るべき筈の金と心得ますから別に三千圓お手許より借りたいと祈り込んでやつた、はゝゝゝとところで三千圓、何に入用だといふから、もし其費途を聞いた上で貸さうといふ事なら、それを聞かずに斷然、おことわり下さいと一本、まゐつた時の面が呵しかつたれ、貸す奴が借りる奴に逆捻を食つて狼狽へた工合、よほど變に妙だつたよ、はゝゝゝ加之も今年の十月に必ず返済す

るといへば、ますく煙に巻かれてね、それにも及ばないといふから、また一本、まゐつてやつた、わづか三千や五千の端金で返済の期日を間違つちやア其方より此方が勘定に合はない、同じ間違ふくらゐなら、せめて五十萬か百萬圓、それも外に何か面白い立派な間違ひやうでもあればだが、單に金だけでは少々、惜しいやうな氣がして間違ひ兼ねますと、眞正面から吹き倒して來たが、あとで考へて見ると、あまり手厳しく吹いて聊か氣の毒だつたよ」

「まア良人、何といふ事を、現在お金を借りるに、そんな勝手な理窟が、よく仰しやれましたれエ」

「なアに乃公だつて、先が先だから、あゝいふ調子に浴せかけたのさ、實際また頭を下げて頼んぢやア無効だ、ぐづぐづ小面倒な文句ばかり多くて、逆も急に出来ない相手だよ世の中に直接の利害を持たない華族といふものは自然の習慣上、なか／＼氣が長くつて

いたづらもの

いたづらもの

決断力に乏しい要領の得ない上に動もすれば三太夫ども、入らざる餘計な忠義立をして  
 れ、は、は、は何、この三千圓を借りた理由か、つまり乃公が世の中へ出る時の手辨當だ  
 よ、六萬圓の五分利で月々二百五十圓づゝあれば、當分まづ此まゝの境遇に衣食住は差  
 支ないとしても、たゞ生きて居るだけで生涯を送れる乃公ぢやアない、どうせ社會へ飛  
 び出して何等か、生きてる以上の事を仕なければならぬ、ね、それに汝、多くもない  
 一家の生活費を割いて持ち出せるかい、汝は乃公に月極めの二百五十圓で米鹽の顧慮さ  
 へなからしむれば宜いんだ、外へ出たの乃公は乃公で、その三千圓を手辨當に一番、や  
 れるだけの事を遣ッて見よう、つまり汝は城を守る役で乃公は戰場へ打ッて出る武者  
 だ」

「ほ、ほ、よく、わかりまして御坐います」

「しかし勝敗は時の運で進退は戦ひの常だから、をり／＼城中へ逃げ込むかも知れないよ

案外また敵の勢ひ激しく攻め來ッて防ぐに違なく、萬一／＼も落城するやうな事があり  
 やア、その時こそ夫婦もろとも城を枕に討死だ、は、は、は、志望ならずと雖も、汝と刺違  
 へて死ねば乃公も本望だ、それとも汝、そつと搦め手から脱け出して互に手と手を取り  
 合ッた落人の方が宜いかね、は、は、は、どうだい」

「たとひ、たとひ、どんな事が御坐いまして、此お城だけはキタが必ず、守ッて居りま  
 すから御安心あそばせ、よし月々あの西田様から運んで下さる兵糧の途が絶えましても  
 絶えた時は絶えた時で、このキタは良人に、むざ／＼お討死させません、その代り一事  
 お願いが御坐いますよ」

「急に改まつたれ、何の願ひだ」

「きつと良人、おき／＼下さいますか」

「きくとも、今の一言に對して何でも、きかざるを得ない乃公だ、全體、どういふこつた  
 いたづらもの



いたづらもの

い

「外でも御坐いませんがね、良人あの癖だけは、是非」

「あの癖、どの癖だ、あまり癖が多過ぎて分らないよ」

「ほ、ほ、例の、いたづら、悪戯にも事を變へて良人、罪で御坐いますよ、新聞の廣告で人を欺して、わざと淀橋の空地へ連れ出したり、かはいさうに女學生の秘密を素ッ破ぬいたり、高利貸を黒棒へ入れたり、年の暮に呼び寄せて沸湯を吞ましたり、その他いろく、ほ、ほ、まア何が面白いのでせう、御自分だつて第一お手数のかゝる事ぢやア御坐いませんか、あれが良人の悪い、御病氣ですよ」

「や、あれかい、はッはッはッ、わるい病氣は酷いね、何も病氣や蟲の故で仕たんぢやアないよ、ありやア汝、頭腦にも身體にも閑暇があり過ぎて困ッて居た時だからね、ちよいと退窟まされよ、ふざけて見たのさ、しかし罪ぢやアないぜ、つまり今日の間違ッた

奴等へ頂門の一針だ、下手な修身講釋をする道學先生の三年や五年よりも、たしかに效能のある筈だ、は、は、色と慾の深い奴等が寒中、そろそろ用もない柏木の淀橋くんだりへ我劣らじと押掛けて、草の生えた空地で、あつと呆れた工合、面白かつたなア、わけて痛快なは鬼幸だつたよ、思ひもよらぬ死亡廣告を出されて青くなッてる奴を、また年内餘日もない大晦日前に屋敷へ引き寄せて、さんざ嘲弄した結句の果に背負投げを食はしてヤツた時の面ア、なかつたぜ、まだ眼に見るやうだ、ことしの花見に乞食を自動車へ乗せてヤツたも、面白かつたね、はッはッはッ」

「それが良人、いけませんよ、あゝいふ事を、さう面白をかしく思ッて居らッしやる間はまた面白だけで済む事ばかりは、御坐いませんからねエ、今までの御身分と違ッて、少しは眞面目に萬事、御用心あそばさないよ」

「わかつた、わかつてるよ、これからは一切あゝいふ悪戯を止さう、實際これからア頭腦

いたづらもの

いたづらもの

にも身體にも暇がないから退窟まぎれに、ふざけても居れないよ、大に眞面目だ、しかし近來は、ちよいと、よく汝に叱られるね」

「ほ、ほ、ほ、良人が皆、お悪いからで御坐いますよ」

「なアに乃公の善い悪いよりも汝の馬力が強くなつて来たんだ」

「あら、馬力、ほ、ほ、ほ、まア酷い事を」

「だつて、さうだよ、今まで乃公の方から通つて来た時分は何でも汝、おとなしく悄らしく只、はいくと言つて萬事、かうぢやアなかつたぜ、つまり女といふものは男の内兜を見透して、いよく安心すると氣が丈夫になつて段々強くなるんだな、居直つて太くなる工合、まるで強盜のやうなもんだ、は、は、は」

「竊盜でも強盜でも、何とでも、すきな事を仰しやつて、キタは平氣で居りますが、例の悪戯は良人、他人ばかりの世間で御坐いますよ」

「うん、よし」

「全くで御坐いますよ」

「あ、承知してる」

用が濟めば、かまはずに早く寢よといふ言葉を、無上の有難味に感じて、階下の飯炊婆も小間使も枕に就けど、まだ階上には雨戸一二枚を閉め残して、寒からぬ肌心地、臥房へも入らず身を横へながら外を覗むれば、墨繪の如き上野の森に、ぼつと霞める春の朧月

「絶えず見馴れて居ても、かうしたところは、わるくないねエ、四邊は閑靜だし、外に入はなし、まるで浮世を離れた山家のやうだ、殆ど市中の景色とは思はれないぜ、加之も時候が宜いね、花は散つて春の末、夏まだ來ない肌心地に、この朧月夜だ」

いたづらもの

いたづらもの

「しくものはなしといふので、御坐いますれエ」

「さうさ、水で洗ッた空に磨いたやうな秋の月よりも、あの、ぼうつとしたところに得もいはれない風情があるよ、何だか妙に人の氣を唆るやうでね、衣香扇影の春も夢と過ぎ去りし多情多恨の才子佳人が、まゝならぬ戀を語ッて情緒纏綿に泣くのは、かういふ時だぜ、しかし乃公と汝は笑ッて楽しむやうになつたなア、はゝゝゝ」

折しも池の端の待合を流し歩いて、この初音町まで來かゝりし新内の連れ弾き、春の夜深に三味の音ますく、研えて、おもはず耳を澄ませし廣行、今更に畫ける如きキタ女の顔を打守りながら、我しらす聲を沈めて、

「おい、雨戸を閉めて仕舞へ、あゝいふものを聞いて、をかしく變な氣から互の身を過つやうな人間にならなかつたのが、實に僥倖だつたよ」

其 二

子爵中の第一、華族中の富豪、その長男に生れて帝大出身の法學士、年は正に三十一いはゆる鬼に鐵棒の身を我から去ッて廢嫡を甘じ、さらに赤裸々たる一個の平民として初音町の借屋住居、これを面白しと見るも見ざるも、以上の事實は既に世間普通の尺度と秤量

を以て極めらるゝ男でなし、さらに絶世の美人、その影にありといへる一事は、一面に於て松川廣行の人格を疑ひ耽溺を惜しむものあれど、また一面に於ては松川廣行の洒落を稱し艷福を羨むものあり、わけて人間の萬事一切を戀のためとして、愛は生命の露なりといふ先生達より見れば、富貴を捨て、戀愛の二字に生きたる松川廣行、殆ど詩的の感涙を以て迎へられぬ、

いたづらもの

いかに夜は遅くとも、朝は必ず六時前、全身の冷水摩擦に朱を注ぐが如くなりし後、露まだ乾ぬ上野の森に對うて二階の障子を開け放ち、さも心地よげにエムシーの煙を白く吐きながら、都下十三種の新聞中いづれか四五枚に眼を通せし頃、キタ女が運ぶは四合の沸騰牛乳に半熟の鶏卵三個とバター焼のパン一斤、

「今朝ア久しぶりで味噌汁を吸ッて見よう、ついでに飯も付けて来てくれ」

「では、さう致しませう」

「おい／＼、それを下げるンぢやアないよ、やはり汝、それは、それで、別に味噌汁と飯だ」

「あら、まア良人、この外に召し上りますの、ほ／＼、これだけでも世間普通の、たしかに二三人前は御坐いますよ」

「他の何人前でも宜い、乃公の胃袋には一人前だ、大い汽鐘は普通よりも石炭の入るもん

だよ」

「あまり石炭が多過ぎて、汽鐘の損じるやうな事は、御坐いますまいか」

「大丈夫、安心しろ、保険付の別製だ」

階下より取次の小嬢、一葉の名刺を持ち來りて、是非お目にかゝりたいとの口上、キタ女これを廣行に渡せば、おもはず眉を顰めながら、

「草野蟲聲、は、ア蟲聲、こりやア文學雜誌や新聞で、をり／＼見る小説家だ、小説家が乃公に逢ひたい、はてれ」

「御存じで、御坐いませんの」

「知らない、第一この乃公は、あまり小説なんか讀まないから、しかし文士といふもの全體、どんなもんか幸ひ一度、かういふ用のない閑暇な時に逢ッて置かう、また何かの参考になるだらう、汝／＼に居ない方が宜いね、年中モデルばかり探してゐる小説家や美

術家は汝に取ッて頗る危険物だよ、は、は、は、

ちらと睨みし額越の目元、水晶の如し、

「また御冗談を、ほ、ほ、ほ」

笑ひながら静に振り返りて、

「そさうのないやう御丁寧にお通し申して、お番茶を差上げなさい」

其ま、鄰室の六疊へ襖越の雪隠れ、

小婢の案内に入り来りし草野蟲聲、ひよろ／＼と高く瘦せこけて前に倒るゝが加く脊髄の

曲りし體格、日陽の活動よりも日陰の沈思黙考に耽れるためか、蒼白き顔色いよ／＼血の

氣を失ひ、元來の神経過敏に營養と運動の不足ますます／＼病人めいて、年輩三十前後、電車

でも往來でも手に放さぬ泰西の詩集一部を携へながら、先生これなくては方角も分らぬ鼻

頭の眼鏡越、

わざ／＼醫者の診察に及ばず、一見その容貌に人生の悲惨を宿して、何とやら哀れを催せし廣行、

「さア此方へ、松川廣行です」

涸れても大川の末に水は絶えず、借屋住居なれど下宿屋より一轉せし新世帯でなく、自然

に整ひし座敷の調子、淺黄無地の縮緬座蒲團、古き桐胴に光琳蒔繪の火鉢、マニラの葉巻

とエヂプトの金口を供せられて、聊か場馴れぬ點あれど、わざと殊更に落付いたる顔色、

「始めて、お目にかゝります、草野蟲聲で」

「や、お名前は久しく聞いて居ります此方は承知して居ッても、先生方に知られる筈のな

い松川ですが、第一よく此家がわかりましたね、全體、どういふ御用です」

「別に改まつて、どういふ用と、いふ用も御坐いませんが、或新聞記者から貴君の事を承

りまして一應は是非、お目にかゝッて置きたいと、つまり我々が説の上に於て筆の上に

いたづらもの

いたつらもの

於て、絶えず常に理想とするところを現在、貴君に依つて遺憾なく實行されたのですか  
ら」

「は、ア、或新聞記者から、加之も先生方の理想を、この松川が、實行したといふ事に、なるンですか」

「さうです、殆ど社會の全部を擧げて、只これ物質的の今日、わけて最も羨望の的となるべき富貴を捨て、更に意義あり生命ある戀のため愛のため、その神聖を何物にも汚されず完全に現實されたといふ一事は、いかに我々の理想を世間に強められたか、いかに我々の權威を世間に發揮されたか、我々としては出來得るかぎりの満足を表して、感謝せざるを得ませン」

案外の人間に案外の満足を表せられ、おもはぬ不意に思はぬ感謝を捧げられて、だしぬけの有難迷惑、流石の廣行も殆ど返答に困りし體、たゞ笑うて挨拶するより外なし、

「は、は、は、どういふ事で來られたかと思つたに、は、は、は、さういふことですか、つまり僕の調子外れに生家を飛び出して今日かうなつた馬鹿さ加減が先生方の、お氣に入つた理由ですな、は、は、は、いはゞ過失の功名ですな、はッはッはッ」

入らざる無用の見當違ひに例の大口を開いて笑へど、その笑ひ聲を寧ろ謙遜的と見る二度目の見當違ひに、ますく膝を乗り出せし蟲聲、

「いや、全くです、社會あらゆる總ての方面に人間あらゆる偽善と虚榮とを以て裝飾せる今日、本能の自然に従うて眞美の結晶たる戀と愛とに生きられたのですから、貴君としてば人生これ以上の幸福なく、また我々より見れば常に高く清く大なるところから暗示されつゝある理想を現在に實現されたものです」

「は、は、は、さう清く高い先生方の理想攻めに尊敬されては困りますよ、なアに實はね、本能の自然でも眞美の結晶でもありません、たゞ祖先傳來の系圖一卷に縛られて家風とかいたづらもの

いたづらもの

格式とかいふ兒戯に類した面倒臭い華族が嫌で、鳥の籠を放れた如く飛び出して来た此處に、さうですれ、まづ妻とすれば、しても差支のない女が一人、あつたからで、その他に何かあるもんですか、は、は、人間の本能も幸福も努力奮闘して得らるれば實際これからですよ、今のところは只この通り、ぼんやりと生きてるのみで、わざと戀にも愛にも生きては居ませんよ、當分は絲に繋がれた風船玉の如く、むやみな方角へ飛ばないだけの事で、いはゆる今日の言葉でいへば、何等の充實もない空虚な無意味な生活状態です、やかましい伯父でもあれば吐鳴り付けられる境涯でせうよ、は、は、は、

快活恬淡の廣行、もはや蒼蠅くなりて殆ど半笑ひに扱へど、先生さらに依然として少しの感じもない顔色、

「いはゆる俗世間の充實したといふ生活状態は、寧ろ我々の眼より却つて空虚な無意味であはれむべき點に満ちて居ります、ついでには甚だ突然で御坐いますが、なほ委しく承ッ

てありのまゝに少しも偽らない神聖の變愛、それ故に貴君を小説の主人公として、いかがでせう、幸ひ目下、他に筆も執つて居りませんから、願はくば奥さんにも一度、この際お眼にかゝつて置けば猶更ら萬事に都合が宜いかと思ひます、つまり架空の想像でなく、現在こゝに貴君といふ實際の主人公があつて、これほど立派に遺憾なく變愛の神聖を遂げられた事實を此まゝ埋めて置くといふは、いかにも我々として忍びない事ですから」

さらに憎むべき點もなく罪もなければ、世間しらすの無遠慮と自個本位の無作法とに、廣行いよ／＼堪らす眉を寄せ鼻を皺めて、今は真正面より顔を見るさへ不愉快の體、横を向いて一度に濃厚なる葎の煙を吐きながら、

「折角ですが眞ツ平、御免を蒙らう、まだ満足に一家の主人公にもなれない松川廣行が、いやしくも今日、文壇の大家たる先生の筆を煩はして小説の主人公には逆も、なれませ

いたづらもの

いたづらもの

ンよ、もし前途將來、數年の後に於て多少、みづから心に誇るべき自信の時でも來ればその節あらためて願ひたい、また愚妻は頗る時代の潮流に後れた舊思想な奴で、自分の知ツたところへも出かけない糞蟲流だから、わざ／＼用もない始めての人に逢ひませんよ、まして刹那の瞥見にも何等かの意味を以て深く印象を残さるゝ先生のやうな人には一種の恐怖心に襲はれて顔色を變へるほどの臆病ものですか

「なるほど、いや當世風に華かな交際場裡に喋々たる婦人よりも寧ろ却つて實際はさういふ温雅なる御婦人に底力の強い戀愛の眞味を保たれて居るんですな、お目にかゝれないだけ、ます／＼我々の尊敬に値ひ仕ます」

「時に先生、實は今日、ちよいと約束の時間があつて他出しますから、其うち、また、おいで下さい、これで今日は失敬しませう」

「は、では近日また伺ひますが、その節、小説の事は暫く置いて、一篇の詩を御覽に入れ

ませう、つまり貴君を詩にしたもので、愛の利の暖き袖に包まれたといふ意味を」

松川廣行、今日は暗劍殺に向へり、小説を御免蒙れば詩にすると迫られ、もし詩を断れば何にするといふやら知れぬ相手、どこまでも免れぬ災難と諦めて、

「有難う、どうか願ひませう」

其まゝ坐を起ツテ二階の降り口より下を向いての大聲、

「おい、お歸りだよ」

やう／＼これで退散せり、

草野蟲聲の去るや否、そつと隔ての襖を開けてキタ女の顔、例の太き濃き肩を八字に寄せし雪の額際、いよ／＼冴えて曉の白き花を見るが如し、

「まア良人、とんでもない、お客様でした事ね」

廣行、ごろりと身を横に兩脚を伸ばしながら、振返りて右手の頼杖、

いたづらもの



いたづらもの

「や、實に困ッたよ、木戸幸四郎、所謂るひとごろしと稱せらるゝ都下第一の悪辣な高利貸、あの鬼幸でさへ手鞠に取ッて面白かつた乃公も、今日といふ今日は實に閉口したれ殆ど一種の責苦だツたぜ、まさか小説家全體が、あゝでもなかつたからうが、文士なにかといふもの、その筆に現はれたところは違ッて、あまり社會の實際に没交渉すぎるれあまり眼前が見えなさ過ぎるよ、責任ある多數の決議でさへ間違ッた事の多い世の中に何事も獨り誇稱の自分から割り出して他に對する相互關係といふ事を少しも知らないから、あゝなるんだぜ、寧ろ哀れに氣の毒な感じが起ツた、等一あの不健全に發育を妨げられて不調和に出來上ツた容貌體格、どうだい、あれで最も健全の腦力を要すべき思想界の優勝者たらんとするんだもの、勢ひ半病人にならざるを得ないよ、鯉節と一般、まるで自分の身體を削ッて行くんだから、同じ鯉節も場違ひだ、ありやア本節でない、かめ節だぜ」

「まア良人、酷い事を、おかはいさうに、あの方だッて何も御自分の身體が悪くなるのをわざ／＼すき好ンでは入らツしやいませんよ」

「入らツしやらなくツても現在の事實が、さうなるだらう、人生の行路上、よくない考へだ、道のために倒るゝといふのは、も少し大きい立派な道のこツたよ、初めて逢ッた乃公を捉へて、すぐに小説を書かうの詩にするのといふやうな、狼狽へた慌てた小さい薄ッべらな道のために大切な生命を懸けちやア、つまるまい、はゝゝしかし罪はないれあれで自分事ぢやアない、他の事にも戀だの愛だのと眼色を變へて騒ぐんだから、おい、是非、汝を見たいと言ッたぜ、見せてやれば宜かつたよ」

「今になツて良人、そんを事を、小説家や美術家は年々モデルばかり探し歩いてるから、面倒だ、隠れると仰しやヤツてさ、お隣席で聞いて居れば、キタの事を良人、何と、お言ひで御坐いました、華族が嫌で飛び出して來た此家に、まづ妻とすれば、さうですれ

いたづらもの

いたづらもの

エ、しても差支のない女が一人、あつたからだ、もし差支のない女が二人も三人もあれば良人、どうなさいます、どんな女を、一時の間に合はせに、お取りで御坐います」

「は、は、は、さういふ工合に聞えたかい」

「さういふ工合に聞えたのでは御坐いません、現在、さう遣に仰しやツたんです」

「そりやア悪かつた、つい口が辻つてね、は、は、は」

「お心のない事が、お口へ出る筈は御坐いません、なるほどキタは仕方なしに已むを得ず兎も角まア當分、かうして置いて戴く身分で御坐いますから、別に恨みがましい御不足を申し上げませんが、わざ／＼始めて来た方にまで」

「や、とんだ事で窘められる、あの平凡小説家め、さんざ眼前で乃公を惱ました上、歸つた後にまで災難を残してやアがる、ちよいと来てさへ、これだ、あゝいふ奴の書いた小説は、定めて世間一般を惱ますこつたらう、いふ事に罪がないと思ツたが、やはり罪の

深い奴だな、今度もし来たなら、今日のやうに哀れ氣を催さず、容赦なしに、頭上から吐鳴り付けてやらう」

「は、は、は、そんな良人、勝手な事が御坐いますか、御自分の悪い事を、棚へ上げて、

「棚の上でも棚の下でも宜いぢやアないか、悪いといはれて謝るのは世間の他人に向つた時だ、それとも汝、この乃公に謝らしたのか」

「は、は、は、御免あそばせ、キタは良人、さういふ覺悟で申したのでは御坐いませんから」

「ぢやア、どういふ覺悟で、言ツた」

「ですから、御免あそばせと、申し上げてるでは御坐いませんか」

「は、は、は、弱いれエ、これが汝、主客顛倒の論鋒といふンだぜは、は、は、時に今日の晝飯は何だ、何を食はしてくれる」

「まだ良人、朝、めし上ツたばかりで御坐いますよ、その時が来ませんと、わかりかねましたづらもの

すし

勝ちたくはなけれど、負けて口惜しく、口惜しけれど腹も立たず、腹は立たれど笑ひたくな  
ないキタ女の風情、すつと其まゝ靜に二階を降り行く殆ど技藝の神に入ると稱せらるゝ名  
優の遺憾なき表情よりも、わざとならぬ自然美の極に達して、惱殺の文字以て外らに形容  
詞なし、

されど馴れし廣行の眼には、この名花一輪これを常として見送りもせず、残れる今日の新  
聞を手に取り上げながら、この木像が今あの馬鹿口をきゝしかと、ふしぎに思はるゝ沈黙  
讀、

花柳の巷に溺れて我ものならぬ美人の一顰一笑に、惜氣もなく家庫を失ひ身を亡ぼし罪を  
犯すものより見れば、この松川廣行、いかにも冥加の盡きた勿體ない奴なり、

## 其 三

きのふ思ひよらぬ小説家に襲ひ込まれて、ちよいと憎からぬ夫婦喧嘩の眞似事をせしが、  
現在こゝに暫く世を忍ぶが如き此ごろの境涯、

あらたまりて誰訪ひ来る人もない身、午前中に都下あらゆる新聞雑誌、午後は内外新刊の  
書籍に耽りて、飽けば其一、飄然と例のステッキを引き摺りながら、近き谷中の邊より上  
野の散歩、をりく田端王子を以て遠出とせる廣行、また今日も何處へ出でしやら、  
春の末、夏の初日影うらゝかに卯月の空は霞みて、樹々の若葉まじりに散り残る花の色、  
白く赤く、ちらほらと人を誘ふ門外の好時節、

良人の出でし後は、なほさら隅々まで心の行き渡りて、歸り來ませる時に塵一筋も見せま  
じと、けさ掃きし八疊を今また掃き出だして、掃を隻手に何心なく二階の縁端より見れば

いたづらもの

袴の裾長く黒の山高帽を深く一重外套に身を包みて靜に歩み來る老體、正しく父の松川廣道、

良人の父とはいへど、その良人こゝに家を去れば、世間普通の言葉に暗れて舅ともいはれぬ身、いとゞ猶更ら嬉しく有難く、用なき平生は睡れる如くに靜なる竹質なれど、慌てゝ手に持てる箒を隣席の六疊へ抛げ込むや否、召使ひに出迎はせては濟まぬ心の我を忘れて駈け降りし途端、梯子段の二つ目より沁り落ちて、玉を欺く眞白の踵に赤く梨地のやうなる過擦傷をうけながら、痛いとも得いはず顔も皺めず、其まゝ入口の障子を引き開け、つゝまやかに坐して待ち受けし哀れさ、

こつ／＼今ごろ何處をステツキの先に叩いて歩くやら、良人たる廣行に一目、見せてやりたし、

父の廣道、門の敷石に歩を停めて、まだ依然たる山村キタといふ表札を仰ぎ見ながら、

すツと入れば、懇慫に迎へし我子の妻、

「おゝ汝、どツかで乃公の來るのが見えたかれ」

「はい」

「廣行は居るかな」

「兎も角も、お二階へ」

跪いて帽子を受け取り、そツと背後より外套を脱がせ、あとに隨いて二階へ上り、床の前に座蒲團を進め、引退りて身を縮めながら、

「御機嫌、よろしう御坐います、折角、お越し遊ばしましたに、また今日も、生憎」

「はゝア、また居らんか、よく出る奴だな、これで二度も來て逢はない」

「どうか暫時、つい其邊までと心得ます」

「いや／＼廣行に逢はんでも、汝が居れば宜い」

いたづらもの

いたづらもの

「恐れ入りまする」

「やはり電話がないと困るな、屋敷の者が何と言ッても、なり／＼乃公は來たいかられ」  
はやキタ女の眼に涙、

「定めし、あゝいふ我まゝな奴だから、いろ／＼世話が多からうな、まア辛抱してヤッてくれ、あれは幼少い時から萬事に無遠慮な、氣の勝つたもんだかられ」

たゞ無言のまゝ、兩手をついて頭を下げしキタ女、艶々しき黒髪の打頭へるは、保ちかれし涙、眼睫に宿らす膝に落ちて、泣けり、泣けり、泣いて聲は聊か曇れど、靜に晴れし目元の額越、

「お茶は、いづれに致しまして」

ます／＼いぢらしく哀れに見る父の廣道、

「さうだな、過日、來た時、なか／＼腹加減であつたが、今日は煎茶を欲しい」

「はい、しかし只今お茶が、あまり、よろしく御坐いませんで」

「いや、入れてくれゝば宜い、たゞ咽喉が乾いてれ」

抹茶は固より煎茶の心得、茶道一切はキタ女が得たる藝中の至藝、おもはず廣道をして舌鼓を打たしむ、

「すべて茶の方は、よほど手に這入ッて居るね」

「お恥かしう御坐います」

「時に相變らず廣行は浴室で、獨相撲を取ッてるかれ、はゝゝゝはゝゝ」

キタ女も始めて笑ひぬ、

「ほゝゝゝ當分の間は、御本でも讀む外に、これといふ御用が御坐いませんから」

「しかし廣行の性質として此まゝ長く、本ばかり讀んで居りもすまい、何か汝に、さういふ意味で話した事はないかれ」

いたづらもの

いたづらもの

「はい、あらためて別に、お話しも承りませんが、いづれ何か、さういふ思召のある事と  
 キタは心得て居ります、十三種も毎日まわりまする新聞を御覧になつた後、なり／＼切  
 り抜いたところが御坐いますから、伺つて見ますと、たゞ笑つたまゝで、しかし、お手文  
 庫に、その切りぬきが澤山」

「そこだ、萬事あゝいふ無頓著で、ばツとして居ても、さういふ點のあるものが廣行だよ  
 は／＼、世間で何といふか知らないが乃公はね、廣行の出たのを却つておもしろく見て  
 居る、何をするか實は心に、楽しんで見て居るよ、第一汝といふ優しいものが付いて居て  
 くれるでな、安心して居る、どうかね、よろしく廣行を頼むぜ」

「は／＼はい、逆も不束なキタ、逆も及びませんが」

「いや、汝に頼んで置けば安心する、ところで今日は何か汝にみやげを持つて来ようと思  
 つたがね、萬事人まかせの體でね、思ふやうにならない」

懐中より取出だせし袱紗包、ざくりと置いて、

「こればね、いろ／＼の少道具を外して乃公が持つて居た中から、選つて来たよ、は／＼」

キタ女、坐を迂り寄りて、押戴けば、案外の重さ、されど今この場に開けて見られもせず

「何か、存じませんが、ありがたく頂戴いたします」

「其うち、また来ようね、あまり長く居れない、何、一人で歸る、それに及ばん、却つて  
 一人が宜い、電車の地圖で、よく見て置いたからね、今日も汝、間違はずに乗替を貰つ  
 て駒込の白山前で降りて、この邊まで辻俵に乗つて来たよ、は／＼、便利だね」

帽子、外套、下女にも手を付けさせず、履物を揃へて門口へ送り出し、その姿の辻を曲り  
 て消えし後、また辻まで走せ行き見送れば、見返りて手を振られ、はツと傍の軒下に身  
 を潜めながらの中腰、

いたづらもの

いたづらもの

やうく客待の俵くさまに乗られしを見届けて後、家に歸りて袱紗包ふしやうみを解けば、綿わたの如くなりし大奉書四五枚まきの中より、眼まなこを射るばかりの金色燦爛さんらん、

刀やいばの目貫めくわ、柄頭つかがしら、切齒きぎ、鉤かぎの數々いづれも名作、このまゝ鑄潰いつぶしても四百目以上の黄金わうごん、印籠いんろうの緒締おとめを外されしか、みごとに大粒おほつぶの珊瑚珠さんごじゆ十一個、

キタ女め、見るや否いな、兩眼りょうがんの涙なみだ、ぼろくくと眞白ましろき頬ほを傳つたうて、其まゝ泣なき伏ふしぬ、

何をなにがな此身このみに賜たまはらむとて、眼めに立たぬやう人に知れぬやう、この品しやう々々いかに御心ごこころを苦しめられしか、我物わがものを盗ぬすむが如ごとくに内々うちうちそつと嘘うそや嘘うそ、いかに四邊あたりを憚おそりて御苦勞ごくろうあそばせしやら、もし差迫さしおりし事ことでもあれば、これを賣ばい拂ばいへとの思召おぼしめしか、たとひ其日そのひに飢ううるとも、キタが手足てあしの動く間ま、これが何なにとして世間せけんの通用こように代かへらるべき、もし帶留おびどめか簪かんざしその他その他にせよとの思召おぼしめしか、たとひ身の冥加みやがにせよ、キタが心の狂くるはぬ間ま、これが何なにとして入いらざる浮世うきよの飾かざりりに用もちゐらるべき、

春夏秋冬、永ながき日も傾かたいて、夕暮ゆふぐら近くに、ぶらりと歸かえり來きりし廣行くわうぎやう、

「や、今日は實まことに草臥くたれたよ、山つゞきに田端たはたから王子おうじまで出でかけてね、砂塵すなぼりで眞まッ白しろだ」  
ばたくと梯子段はしごだんの下したにて袖そでを叩たたき裾すそを拂はへば、キタ女ぢよおもはず身を反さかして顔かほを横よこに、

「あらまア良人あたら」

その聲こゑを後に聞きき流ながして、はや二階にがいへ上ある否いな、我身わがみを抛なげ出ですが如ごとき大おほの字じ、これも華族けわしゆでは出来できぬ氣樂きらくさ、

「良人あたら、何故なにがお早はやく歸かえつて下くださいませんの、また今日けふお父様ちやうさまが、入いらつしやいましたよ」  
起おき直ただりし廣行くわうぎやう、

「しまつた、また入いらしつたか、殘念ざんねんだつたよ、これで二度にどお目めにかゝれなかつたな」

いたづらもの

いたづらもの

「勿體なう御坐いますよ、こゝへ來ようと思召せばこそ、誰に御遠慮のない中を良人、いろ／＼お氣兼ねそばして、馴れない電車や辻傳で入らッしやるンですもの、御存じなくとも、やはり御不孝に當りますよ」

「どうも乃公より汝の方が、お氣に入ッたばかりでなく、縁が深いやうだね」

「それに良人、有難い事に此キタを何と思召してか、こんな、おみやげを」

袱紗包を解いて眼則に開かれし廣行、我は家を捨て、も父は我を捨て給はぬ心の品々、差俯いてまた今更の嬉し涙に泣く妻よりも、身に徹へて辛し、

「さうか、これを汝に下すッたか、代價にして幾何になるか兎も角、こりやアね、家に傳はッた名作物ばかりだよ」

「かやうなものを戴いて、もし、お父様の御迷惑になるやうな事は御坐いますまいか」

「なアに、さういふ心配は入らない、父の手許で、まだ外に澤山ある中だから、しかし思

召は厚いぜ、よほど汝が可愛いと見える」

「いゝえ、これも皆、良人のためで御坐いますよ、なるほど廣行が家を出たのは、かうい

ふ立派な理由であツたかと一日も早く良人、おなり遊ばさないと、すみませんねエ」

「世間普通の親御とは違うて、一切お暮らし向の事に良人の御心配ない、お父様ですもの、他より猶更ら御孝行も、お樂に出来る筈で御坐いませう」

「いち／＼さういはれると困るが、こゝ暫時だ、まア黙ッて見てをれ、田端から王子まで歩いて草臥れるが天下横行の道に凹垂れる乃公でない、まさか慈愛の深い父に不肖の子を持つた歎は發せしめないよ、華族を脱し子爵を捨てるには、それだけの必要と覺悟とあツてのこッた、あの田から取ッて來た三千圓、あれに手を付け出す時は、そろ／＼乃公の社會へ出る時だ、しかし三千圓の事に付いて今日、父は何もいはれなかつたらう

いたづらもの



いたづらもの

な、さらに御存じのない様子だつたらうな、いくら西田でも固く念を押して来たから、僅あれくらゐの金で父の耳には入れまい、なアに餘計な御心配かけては、猶更ら申譯ないからよ」

其 四

きのふ半日の野外に草臥れしか、いかに夜は遅くとも朝は必ず六時前の廣行、今朝にかぎりて九時を過せど臥房を出でず、はや十時に近きころ、なほ其まゝ夜著の襟に顔を埋めて、もしやと思つて静に膝行り寄りしキタ女、夜著の上に軽く片手を置きながら、

「良人、良人、どう遊ばしたの、もう十時で御坐いますよ、ねエ良人」

夢にも入らざりしか、夜著の中より寢言でもない聲、

「むゝさうか、むゝ」

「どツか御氣分でも、お悪いのでは御坐いませんか」

夜著の襟を持ち上げて、これ見よとばかりに、ぬツと顔を差出せし顔越、

「なアに今朝ア平常よりも早く、天明前に眼は覺めたがね、ちよいと考へる事があつて、

やうく今その考へが付いたところだ、途中で起きちやア折角の考へに龜裂が入るから

」

「ほゝゝ、夢と引繼ぎで寢ながら今まで考へて居らしツたの」

「夢と引繼ぎ、こりやア汝に似合はない洒落だ、はゝゝゝどりや起きよう、もう十時かい」

枕頭に聲を潜めしキタ女、

「階下に、お客様が」

「客、誰だ、謝れば宜いに」

「それがね良人、断りきれない人で御坐いますよ、あの新聞屋さん、例の淀橋一件から、

いたづらもの

いたづらもの

ちよいとく来たかけた新聞屋さんですからね、一應は断つて見ましたが、是非お待ちすると言つて、階下の六疊に先刻から」

「うるさいね、しかし始めての奴でなし、待たした以上、仕方がない、一時日は小説家で今日は新聞記者か、は、は、は、だが穴居的小説家と違つて多少、世の中の空氣に觸れてるから話しの分る點もあるよ」

襯衣のまゝ例の冷水摩擦に降り行きし後、手早く夜具を疊み座敷を掃き出して、待たせし新聞記者を迎へ、慇懃に茶菓を進めながら、

「大變に、お待たせ申し上げました」

これまで二三度も見ながら、今日また見直せば、今日また新に冴えて、ますます水際の立ちし美人、見るほど眼に馴るゝ容色とは違ひ、見る毎に何とやら我身を照り返さるゝ心地、場うてのせざるを以て第一の條件とする新聞記者も、聊か固くなりし體、

「朝から、お邪魔いたしましたして、何とも恐れ入ります」

「いえ平生は、かやうに遅くも御坐いませんが、つい今朝に限つて、失禮をいたします、どうか貴君、お樂に、お膝を、おくづし遊ばして」

「は、ありがたう、いや、これで結構です、しかし此邊は閑靜で宜しう御坐いますな、塵埃だらけの中を飛び廻つてゐる眼から見ますと、實に、まるで、別世界の氣が致しますよ」

「嘘、お忙しう入らつしやいませう」

「時に昨年暮は、とんだ御迷惑で御坐いましたな、あれ以來まだ残念ながら例の、いたづらもの、わかりませんよ、随分手を盡して見ましたが、よほど巧に晦まして居りますね、第一あの後に業を仕ないからでも御坐いますが」

「あの節は、いろく御深切さまに」

「いや、あれが御縁になつて、御主人に手前こそ、御厄介になつた事が御坐います、舊臘、いたづらもの

いたづらもの

途中で、お歳暮を戴きまして」

「まア失禮な、途中で、いえ萬事あゝいふ露骨の人で御坐いますから、この後とも一切お氣に、お觸へ下さいませんやう、よろしく、お願ひ申し上げます、ほゝゝ、少しも存じませんで」

「どうして、あれだけの名門で、よくまア、あれだけ磊落恬淡な、平民的になられますよ」

「ほゝゝ自分でも常に、さう申して居ります、乃公は百姓か土方に生れる筈を、あんな家へ間違ッて出たんだと、ほゝゝ、總てが其調子で御坐いますから、つい人様にも失禮ばかり」

折しも全身の冷水摩擦を終りて、顔も手も赤く酔へるが如くに入り來りし廣行、座に著いて輕き會釋、

「やア暫く、逢ひませんな」

「その後は、御無沙汰を致しました、實は社用で、京阪地方へ旅行中で御坐いましたから」  
 「さうですか、京阪の春は格別、また宜いでせうな、おいキタ、今朝ア晝飯と同時にするよ、馬鹿に寢坊をした、時に汝、この先生と何か類に談話をして居たらしいが、氣を付けないと、いカンで、すぐに新聞種だ、或意味に付ける一種の斥候で、かういふ先生には觸らぬ神に崇なしたよ、ほゝゝ」

「こりやア酷い、新聞記者を厄病神と同じ取扱ひは少々、酷う御坐いますな、ほゝゝ」  
 キタ女も笑ひながら坐を避けし後、廣行、胡坐のまゝの席を進めて滿面の微笑、

「どうですか、近ごろ面白い事がありますか、この松川も君、首尾よく放免されて、いよく殿様を遁げて出たから實に暢氣だ、心靜に體豊に骨また伸びたりといふのは、これだらう、たしかに五年や十年ば長生するに相違ないね、ほゝゝ」

「しかし世間の俗物から見れば、不思議に思ッて居りますよ、富貴、これ權勢の今日」

いたづらもの

いたづらもの

流石は人に馴れたる新聞記者、俄に四邊を見廻し首を縮め聲を潜めて、

「その不思議には幾分か、奥さんの美も含んで居りませう、もし他人なら幾分でなく、全部あの美が正體ですな、へへへへ」

廣行、反身の高笑ひ、

「はッはッはッ、もし現在の事實が雄辯とすれば、まづ今のところ、奈何せん、さういはれても仕方がない、しかし不思議の正體は、別にありだ、今に物凄く現はして見せるかられ、はへへ、時に君、草野蟲聲といふ小説家、ありやア君が話したンぢやアないかれ、ある新聞記者に聞いたと、言ッて來たぜ」

「はへへア蟲聲、伺ひましたか」

「伺はれたよ、大に伺はれて大に惱まされた、いくら暇でも、あへいふもんを君、よこしてくれては困るね、もし人間らしい奴を紹介するが宜い、ありやア、人間放れを仕す

ぎてるよ」

「いや、實は、貴君へ、あれを紹介いたしたのでは御坐いません、ちよいと只、お噂をしたらばかりで」

「お噂でも何でも、うるさいよ、蒼白い瘦ッこけた牛病人の面で、熱に浮かされた囁言のやうな戀だの愛だのと、まるで色餓鬼の亡者だ、ありやア讀んで字の如く蟲聲、蟲の聲でなく、蟲の息だぜ、しかし本人は氣の毒なもんだね、あへいふものを今日社會の一部に歓迎するから、わいて出るンだよ、樹まづ腐りて蟲これに生ずだらう」

「あの蟲聲、をりく人の談話を横合から聞き嚙ッて、それが自分の何かに觸れると、すぐ向う見ずに出掛けるといふ、わるい病ひが御坐いましてね」

「何かに觸れるンぢやアない、大體に氣が觸れてるンだらう、はへへ、蟲聲は蟲聲として君、今日、どういふ用で」

いたづらもの

いたづらもの

「御無沙汰の、おわび旁、實は今日、我社の使者として伺ひましたか」

「一個人の君でなく、新聞社の使者として、はてね、全體どういふ事で」

「つまり簡単に要領だけを、實は貴君を我社の記者として、お迎へ申したので」

「ふ、ウ、この松川を、新聞記者に」

「さやうです、子爵家の御相續人では却ッて雙方に困りますが、今日の貴君として職業中の最も高等なる職業、社會の木鐸たる新聞記者は、決して御名譽を損すべきものでないと信じて居ります、無論また我社としては出來得るかぎり、御優待する覺悟で、もし御承諾を戴けば、あらためて社長が直接、伺ひますが、いかゞで御坐いませう」

松川廣行、おもはず腕を組んで、暫し兩眼を閉ぢしが、閉ぢし兩眼を開くと共に、護謨人形の如く首肯いて、

「おもしろい、新聞記者は面白い、愉快だ」

「是非、御承諾を」

「いや、面白いには面白いがね、即答は出來ないよ、考へた後でなければ」

「いづれ萬事の御都合も御坐いませうから只今、すぐ御即答を願はずとも、お考への上で」

「ところで君、その考へ中が少々、長いよ」

「お長くとも、四五日の内には」

「は、は、そりやア君、世間普通の考へ中だ、この松川は尠くも二三年、考へるぜ」

「え、二三年」

「わるくすると四五年だ、まづ此方で考へるよりも、そツちで考ふべき事ぢやアないがね、いまだ曾て記者たるに何等の經驗もない初心、素人の松川廣行を、都下有數の新聞社として出來得るかぎりの優待に招くといふ必要は全體、どこにある、それが分らない、もし他より今日この松川廣行を見れば君、たゞ華族から平民になつた事と、たゞ帝大出身

いたづらもの

いたづらもの

の法學士といふ、つまらない肩書のあるだけだらう、これで新聞社が出来得るかぎりの優待するといへば、その新聞社なるもの、權威を疑はなければならぬ、天下萬人の最も羨むべき華族を去つて富貴を捨つるに弊履を棄つるが如き法學士松川廣行氏を我社に聘せりといふ、この廣告だけでは君、あまり小兒だまして、あまり無意味ぢやアないかね、はゝゝゝいかに新聞記者は面白い、男子、世に立って劍を握らざれば筆を執るべしで、宿志もし遂げずんば、この松川も寧ろ新聞記者になつて見ようと思つてゐるが、その新聞記者たるまでに相當の道行があるから、尠くも二三年、或は四五年、どうしても歳月の必要があるぢやアないか、考へ中とは君、この首を傾けて座蒲團の上に坐りながら考へる意味でないよ、第一また生活のために新聞記者たるは嫌だ、食ふために筆を執るくらぬなら、鋤鋤を取つて麥飯で生命を繋ぐよ、はゝゝゝ大體まづ以上の理由によりて、折角だが、お断りする、あしからず社長に傳へて貰ひたい」

ぎやふんとまぬりし記者先生、今更ら眼を白黒にしながら、

「は、なるほど、貴君として、さうで御坐いませうな」

「まア、かうですな君、幾何お世辭よく饒舌ツても、これ以外に御愛嬌を呈する事が出来  
ない」

これで世辭よく愛嬌を呈したといふ、もし世辭愛嬌を取つて退けて饒舌り出せば、いかに  
吹き飛ばさるゝかと俄の遁げ腰、

「いづれ、また其うちに伺ひますから」

「をりく君、談話に来てくれ給へ、當分まだ此まゝに遊んで居ますよ、いはゆる遊食の  
民でね、はゝゝゝ」

記者先生の去るや否、手を叩いてキタ女を呼び、

「午飯、午飯」

いたづらもの

## 其 五

千葉縣、佐倉の兵營勤務、陸軍中尉松川廣國、今年あけて二十七歳、廣行の廢嫡後は當然その子爵を嗣ぐべきもの、

その弟を佐倉に訪うて、宿に待ち受けし兄の廣行、

兄弟こゝに相對へば、別れても切れぬ骨肉の情、

「かうなるに付いては、幾度も泣いてくれたが、その時も今いふ通り、この乃公には、何物も動かすべからざる理由と自信があつての事だから、祖先に對し父に對して、まことに申譯もないが、どうか、この我まゝを見遁して貰ひたい、また今日あらためて來たのは外でもない、そろ／＼その理由と自信とを事實に現はすべき時機が近いて來たから、これで當分、汝にも逢はない覺悟だ」

「は、よく、わかりました、廣國も今更ら女々しい、何事も申しません、しかし兄さん、この廣國は軍人であるといふ事を、御承知下さるでせうな、一朝もし國家に急あらば、死すべきものであるといふ事を、御承知下さると共に三男の廣正、あれは腹違ひの弟であるといふことも、多少その間に、含んで居て下さるでせうな」

「承知して居る、そりやア承知だ、萬一さういふ事があれば、この兄は自分一個のために祖先以來、連綿たる松川家の祀りを斷つてまで、おのれの快感を恣にしない、しかし汝、腹は違つても廣正は弟だぜ、この兄の目的を捨てるのは、その上だよ、もし汝に萬一の事があつても差支ないぢやアないか、さう小さく出ては、いかんれ」

「いや、別に殊更、小さく出るんではありません、同じ血にしる、本腹と妾腹、家に取つての輕重、いづれにあるかと、いふのです」

「その輕重論は暫く置かう、まア兎も角、二人の兄弟が家にあれば宜い、性行ともに華族いたづらもの」

いたづらもの

として不似台の乃公は、去った方が家のためだ、つまり乃公が華族を嫌って出るよりも華族そのものが乃公の存在を許さないといふ方が適當たらう」

「ぢやア廣國の輕重論と兄弟の適否論を、暫く此まゝに交換して置ませう」

「さうだ、ぐつぐつ議論めいて要領を失った談話の迂り遠いのは、たゞ時間潰しの面倒ばかり多くて雙方、つまるところ何にもならない」

「實は、をりく、初音町とかへ、伺ひたいんですが、わざと差控へて居ります」

「いや、來ずに置いてくれ、過日から父が二三度、内々で來られたが、有難いは有難いが寧ろ苦痛だよ、汝にしても、いよく戦闘に出るといふ場合、情に泣かされるより寧ろ泣かされない方が、よからう、それと同じだ、これから社會に打って出る乃公として、なるほど、あの目的のために家を出たかといはるゝまで一切、來てほしくない」

「その邊、よく了解しました」

「ぢやア、これで、別れる」

「ステンシヨまで、お送り致しませう」

「なアに、入らない、よけいなこつた」

「では此まゝ御免を蒙りますが、兄さん、お寫眞を一枚、送ッて下さいませんか」

「寫眞、屋敷に数枚も残ッてる筈だ」

「貴兄のでなく、外に一枚、まだ、お目にかゝりませんか」

「持ッて居てくれるか」

「施末には、致しません」

「おくる、すぐに撮らして、おくる」

いたづらもの



いたづらもの

洒々落々として快活なる兄の廣行、軍人氣質の恬淡に育ちし弟の廣國、互に男らしく手を握ッて相別れしが、寫眞の一語には、兄弟おもはず一滴の涙、

汽車は午後四時に佐倉を發して、廣行の性行、寧ろ三等の面白きも待合の混雜を見て二等に乗り込み、片隅に背を埋めながらステッキを股に夾み腕組みを添へたるまゝ千葉に著きしころ、どやどやと入り來りし五六人の客を何心なく見れば、その中に一人、差對ひに腰うちかけし老爺は、正しく木戸幸四郎の鬼幸、

いづれ千葉にひとごろしの歸途、赤切符 誤魔化すべき奴が此室へは、いふまでもなく一等の往復旅費と夕飯の代まで拵ぎ取ればこそ、ことし六十の阪を越せど慾の皮に膏ぎツて皺もない赤面、あけても暮れても他人の身代を餌食に覘ふ熊鷹眼を光らし、泣いても喚いても空を嘯くに馴れた禿頭、吸ひ餘りの紙卷莖を耳に挿み、古びたる手提げの小カバンを兩手に押へて膝に上せ、ひよいと見る眼の前には松川廣行、

いたづらもの

去年の暮に沸湯を吞まされて、ぶろく身を顛はせしほどの遺憾はあれど、實は内心その手並に驚きし鬼幸、まして今は満員の汽車中、うか／＼すれば何を吐すか知れぬ相手と、横を向いて無言に窓の外を眺めながら、絶えず尻目に、じろ／＼、今日の境遇、こればかり氣にせる妻の諫言に、いたづら一切は禁物の折柄、もし去年は失敬といへば、いかに残念でも、どう致しましてと、いふべき場合の鬼幸なれど、膝と膝と一尺も離れぬ真正面に此老爺を見れば、自然に手の出る小兒の玩具に等しく、堪へきれぬ例の廣行、むらくと湧く面白さに、あたり構はず、だしぬけの大聲、

「やア鬼幸先生、暫く、どうだれ近來は、いくら高利貸でも君のやうに太くなると人を苦しめるのみでなく、たまには人の急場を助ける事もあるだらうなア、は、は、は、」

流石の鬼幸も、はツと思はず不意に膈腹を蹴られし心地、されど元來が鬼といはるゝ都下第一の強が者、あれが兼て聞き及ぶ名高い鬼幸かと一室の満員に蛇蝎の如く視線を注がれ

いたづらもの

て、もはや遁げも隠れも出来ぬ以上は、わざと平氣に向き直りぬ、

「何、鬼幸、木戸幸四郎といふ戸籍面に立派な名があるんだぞ、また高利貸が、どうした借りる奴あつて貸す職業、ふざけるな青二才奴」

「は、間違ひのない事を言つた筈だに、酷く怒つたね、さう氣に觸へなくつても宜からう、なるほど君の年齢に比べると青二才だ、は、しかし此青二才に去年の暮、背負投げを食つたのは氣の毒だつたよ、あの時の五千圓、外で幾何になつた」

「よけいな、お世話だ」

「は、ア冗談かと思へば全く、怒つてるな」

「華族の種にも、きさまの様な生れ損ひが出来るかられ、油断のならない世の中だ」

「いや今ア華族でない、平民だよ」

「平民でも、そんな圖太い白無垢鐵火ア居るまい、もし食へなくなりやア何をするか、知

れた奴でない」

「それこそ、よけいな世話だ、食へなくつても金を借りに行かないから安心しろ」

嚙んで吐き出す如くにいはれて、みる／＼顔面は烈火の鬼幸、おもはず腰を捻り首を振りし拍子に耳へ挿める吸ひ餘りの糞を振り落せしが、今この此場合にも本性を失はぬ奴、はつと我しらす手を伸ばして拾はんとすれば、ころ／＼と脚下へ待ち受けし廣行、びしやりと踏み潰しぬ、

「や、この野郎」

額越に睨み上ぐるを、は、と笑ひながら袂より金口のエムシー五六本 掴み出だせし廣行の掌に上せて差出しぬ、

「折角の吸ひ餘りを踏んづけて濟まない、さア辨償する、いくら強慾でも、これで不足なからう」

いたづらもの

いたづらもの

びしやりと其手を叩き落せば普通の人間、差出だせし五六本を悉く奪ひ取りて、  
「よし、堪忍してやる」

これが雙方たゞ二人の喧嘩でなく、殆ど満員の乗客、いづれも片唾を呑んで、見物の眼前  
怯めず臆せず、じろくくと見廻しながら、

「一文の稼ぐ事も知らずに、かういふ葺を煙にするとは、冥加の悪い奴だなア」

乗客、あつと呆れて互に無言の顔を見合はし、本人の廣行また急に腕を組んで感に堪へた  
る體、

「逆も凡人ぢやアない」

汽車の稻毛に著くや否、兩國の終點まで行くべき筈の鬼幸、ふいと俄に飛び降りぬ、  
やはり逃げ場さへあれば遁げる奴、あれでも多少まだ凡人に似たところあり、

鬼幸の遁げ出だせし後は、乗客の視線を一人に浴びし廣行、中には親類か朋友の怨恨でも

あるか、顔に痛快を叫んで拍手喝采するものあれど、今更ら思へば我ながら馬鹿げたり、

もし喧嘩の相手とすれば、たとひ勝つても手柄にならぬ奴、加之も吸ひ餘りの朝日一本に  
エムシー五六本を取られしは利に於て負けたる我、いよく馬鹿げたり、

いづれにせよ、天下に面白い事の多き今日、高利貸たゞ一疋を翻弄して面白く感ぜし我、  
あまりに馬鹿げ過ぎたり、

兩國のステーションへ著くや否、一時に吐き出されしプラットホームの混雑に紛れて、廣  
行また遁げ出しぬ、

「良人、今日、どこへ入らッしやいましたの」

「ちよいとね、急に思ひ付いた事があつて佐倉まで、久しぶりで廣國に逢つて来たよ」

いたづらもの

いたづらもの

「おや、佐倉へ、かげながら承りますばかりで、まだ御意を得ませんが、御機嫌よろしう御坐いますか」

「む、達者だ、相變らず元氣だよ、汝、やはり廣國の事を、何とか思ッてゐるかれ」

「そりやア良人、お目にかゝらなくツても、良人の御舎弟で御坐いますもの」

「や、汝の氣として、さうだらうな、實はね、廣國も汝の事を思ッてるぜ」

「あら、まア、お優しい事」

「性質、さッぱりとした奴で、猶更ら軍人だからね、べちや〜饒舌らないが今日、別れる時、あの無口な奴が、汝の寫眞を一枚、くれというたぜ、龜末には致しませんというたぜ、至急、撮ッて、送ッてやれよ、嫂だ」

いづこを佐倉の方角とも知らず、たゞ暮れ行く軒端より家外の空に對うて、無言のまゝ涙の頭を下げしキタ女、これを見る良人の廣行また無言のまゝ顔を反けぬ、

## 其 六

郵便といふ聲に投げ込みし一枚の端書、キタ女まづ小婢より受取りて見れば、同窓會よりの案内状、麹町區下六番町松川廣行殿とせし上に、張紙して、下谷區谷中初音町三番地山村キタ方へ轉送と書し、その下に朱肉の角印は、松川家執事の五文字、

たれ憚らぬ父上さへ御老體を馬車にも召さず、わざ〜こゝへ忍び來まして此身を我子の妻と憫れみ給ひ、まだ御目にかゝらぬ弟御さへ、かげながら此身を他人とは思召さず此身の寫眞をと優しう慰め給ふに、その家の召使はるゝ人として呼捨てに山村キタ方とは、あまりに恨めしく、なさげなく、口惜しけれど、これを此まゝ良人に見せて渡す妻でなし、そッと人しれず張紙を取りて袂へ丸め、二階へ持ち行けば、

「ふ〜ウ、同窓會からだね、久しく出た事がない、今年は一度出て見ようかなア」

いたづらもの

いたづらもの

「學校時代の、お友達ばかり御會合なさるンですか」

「さうだ、同時に卒業したものばかりで、四十一人の内、今この東京に、半分ぐらゐ居るだらうよ、こりやア番町の方へ来た端書だね、こゝへ来るには張紙があつたらう」

「はい、御坐いました」

「それを、どうした」

「もう、入らないものと存じまして」

「入らないものでも、わざと取るに及ばない、どういふ工合に張紙を仕て来たか、つまらないこツたが、ちよいと見て置く必要があるンだ、書いたものを其場で捨てるとは、汝に似合はないこツたね」

「以後、氣を付けまして」

「しかし破ッて捨てもすまい、今のこツたから、どツか此邊にあるだらう、探して來い」

いつにない不機嫌も、實は大膽なる内に案外の細心を備へて、をりく事と品によれば嚴格の廣行、

「是非、探して來い、ない筈はなからう」

キタ女、苦しげに袂より、丸めし紙を展べて良人の前、

「なんだ、袂へ入れてたのかい、早く出せば宜いに」

その張紙を見るや否、山村キタ方といふ文字に眉を顰め、一種異様の眼を光らして、おもはず鳴らせし舌鼓、

「けしからん奴だな、かういふ、わからない馬鹿どもが揃ッてるから困る、汝には氣の毒だツたね」

「いゝえ、何とも思ッては居りません、御用さへ届けば」

「まア堪忍しろ、暫時だ、今に、汝の下駄を直さしてやるよ、ね」

いたづらもの

いたづらもの

「はい」

「時に、同窓會へ出たもんだらうか、やはり今まで通り出ない方が宜いかれ」

「それは良人の、お考へで御坐いますよ」

「いや、かういふ事は乃公の考へよりも、却つて當り觸りのない汝の無意識に極めた方が宜いね、すべての上に眞ッ直で邪氣のない汝は或場合と或意味に於て乃公のため一種の暗示だよ、いくら止めても決行する事は決行するが、こんな事は汝の指圖に従つた方が無事だ、下手な易者よりは、すつと遙に眞理を含んでるかられ」

「ほ、ほ、ほ、大道の賣卜者で御坐いますの」

「ほ、ほ、ほ、そりやア兎も角、同窓會、どう仕よう」

「きちくと今まで、お出にならないもんなら今年に限つて、變で御坐いますれ、もし今年お出になれば來年から必ず、御出席なさらないと、いけますまい、第一それに今こゝ

で、申さば御身分も何も、變る時で御坐いませう、いッそ、もう一年このまゝ御見合は

せ遊ばして、いかゞでせう、お友達と御疎遠になる、ならないは別と致しまして」

「よし、止めた、時に汝、何日、寫眞を撮る」

「はい、撮る事は撮りますが、お言葉に甘へて、これがキタで御坐いますと直に、早速お送り申しても、あまり失禮のやうで、また遅くなれば猶更」

「そんな汝、よけいな心配は入らんよ、廣國は軍人だ、ほしいといへば早く送つてやれ」

「恐れ入りますが良人、近日また入らしつて、お談話の後で、ついにて、持つて來たと」

「馬鹿な、當分まづ逢はないと約束して來たに、わざわざ汝の寫眞を届けに行けるかい、それなら、本人の汝を連れて行くよ」

「ほ、ほ、通常の手札形に致しませうか、四ツ切、カビネに致しませうか」

「何でも宜い、早く撮つて送れよ、しかし束髪より白襟紋付の丸鬘にしてくれよ、どうし

いたづらもの

ても汝は純日本式の盛装に限るよ、無論、半身でね、真正面は、いけない、七分といふところを、三四通り撮るんだ、その内で乃公が見て、どれか一個、送ッてやらう」

遠慮しながらも胸に溢るゝほど嬉しきキタ女、うるさいと叱りながらも錦上に花を添へたき廣行、

「や、幸ひ丸鬘だ、寧ろ寫真には結ひ立よりも宜からう、ちよいと撫で付けて今日、すぐに、これから撮りに行けよ、毎日々々乃公ばかり勝手に出歩くから、たまには氣晴らしに汝、ついでだ淺草邊でも歩いて来るが宜い、天氣も、よし、小婢を連れてね」

「まゐッても、よろしう御坐いませうか」

「いゝとも、今日は乃公が留守番する」

わざ／＼鏡に對うて殊更に容色を作らずとも、うまれながらに天生の美人、たゞ一口に美人といふ世間の色香とは違ひしキタ女が、意を凝らし思ひを潜めて粧ひし風情、まだ晴が

ましく世に出でざれど今は心に誰憚らぬ松川家の五つ紋、なほさら奥行しく品位を添へ、自然の容姿を失はぬ黒羽二重の袴、しつとりと優美に和いで青みかゝりし首筋の生際いよ／＼白襟に冴へ渡り、手薄き此ごろの流行を逐はざる古代模様の帯、ぎゆうと固く身を締めて、胡粉を塗れるが如き單足袋の張り切りし脚下、わざと首を伸ばして差覗きし良人の顔に、くるり横を向いて微笑を隠せし頬の邊り、いはゆる神來の曲線美、人間業の裝飾一切を放れたり、

これ見よがしに透して時候を急ぐ當世風、その上より蟬の羽に似たる被布でなく、無残に勿體なや、花を包むが如く惜し氣もなく、セル地の單衣コートを著流して、隻手を疊に跪きながら、

「まゐります」

「混雑の中は、なるべく氣を付けてね」

いたづらもの

いたづらもの

「はい」

すつと立ちし後姿、この名玉いづこに一點の瑕瑾ありや、天下の美術家に批評させたし、わざと近處の宿俵を避けて三四町も先の辻俵二臺を走らせ、良人の教へし寫真屋に先客ありて一時間の餘を費し、やうく淺草行の電車に乗れば、ぎつしりと満員の中より美人優待の特志者三四人、おもはず立って吊革にブラ下りながら席を譲りぬ、

雷門に降りしは午後の二時過ぎ、仲店なかつせの往來に白髪しらぎの老爺おぢまで振り返らせ、觀世音くわんせおんには我身より第一まづ專念せんねんに良人おつとの上を願ひ、閑靜しづかなる上野の森に馴れたる眼は、六區の繁華はんわ雑踏ざつたつに召連れし小婢せうひを振り返りながら、

「賑にぎやかだねエ、まア大變な人、平常つねに出ないから田舎者いなかものと同じ事だよ、ほゝゝゝ」

「今日は奥様、土曜で御坐いますから、猶吏なほざら」

「あゝ土曜どようだつたれ、今日けふこれで、あすの日曜は、どんなだらう」

「あまり向は混こみ合あひますから、此方こつちの池の方へ廻まわつて、あの茶店ちやみせへでも奥様」

「さうねエ、あゝいふ中で揉もまれるより、あの茶店で池いけを隔へだてて見た方がよかりさうだね」  
花屋敷はなやしきの前より横に樹間ここのまを縫ぬうて、茶店の方へ歩み出せし背後うしろより、不意の聲、

「おキタさん」

はつと驚おどろきぬ、驚おどろきも驚愕おどろ、この淺草あさくさの雑踏ざつたつ中、おもはぬ不意に我名を呼ばれて、呼ばれし聲に振返ふりかへれば、あまり近ちかころ見ざる櫛卷くしまきの裏うら、洗あらひ晒さらせし木綿あめんぼ袴はかまに古ふるびたる半襟はんせきの四十女よそぢ、はや山の端はまの摺すり切れし晝夜帶ちうやおびに前垂まへたかけのチビたる東下駄あづまた、浮世うきよの下司かみ馴なれし氣輕こごじに小腰こしを屈かめて、にこしくしながら、

「まア、おキタさん、大層りつぱ、立派りつぱな奥おくさんに、おなりだ事ねエ、實は先刻まうきから、もし間違まちがつちやア濟すまないと思つて、さんざ見直みなしたんだよ、さうねエ、もう七八年になるものあの時分ときわよりは猶お前まへさん、容色まりやうが上あつたよ、ほゝゝちよいと分らないくらぬだ、今

いたづらもの



いたづらもの

今何處どこ」

キタ女が十八の暮、あたら清淨無垢の身を毒蛇の舌に舐められンとして、今の廣行に救ひ出だされし頃、手を以て遮られど口車くちぐるまに乗せて我身を敵の餌食えじきに運ばむとせし女、現在は知らず其時は髪結のお留、

逢はずとも忘れぬ遺恨、にくい女と思へど、こゝは淺草の公園、すぐに人立の中、聞かせたくない下女を連れて、いやな事も言ひたくない辛さ、わざと絞り出す微笑を浮べて、

「おや、まア、どなたかと思ひましたに、お珍らしい事、久しく、お目にかゝりませんでしたれエ、立話たちばなしも何ですから、兎も角あの茶店へ」

「私わたしもね、おキタさん、その後の事に付いて、いろくお話し仕たい事がありますよ」

池の端の茶店に入りて、小婢こめいを彼方の床几しやうぎに隔てさせ、四邊を見廻しながら、

「やはり今、あの頃と同じ、御職業ごしやうばいですか」

「これといふ外に藝のある身ぢやアなしね、仕方なしに今ア千束町で、やはり手を油あぶらだらけにして居ますが、いやもう、さまざま不運ふうんつゞきで、よく無事に今日まで来たと思てるくつらぬですよ、しかしまア、お前さんは結構だね、お見かけ申したところで、さぞ御安樂ごあんらくなこつてせう、第一あの時分から汝さんは、どうも出世しゅつせをなさる人に出來ただよ、争あそはれないもんだねエ、私の思つた通りだ」

「あら、困りますよ、さういはれては、ほゝゝ、只、どうか、斯うか、暮らして居りますばかりで」

「御冗談ごじやうだんを、時に只今お住居、どこですの、旦那様は、どういふ方、今だから、いひますがね、あの時分まだ初心しんしんだと思つて油断して居た、其お前さんに皆が出しぬかれてさ、あつと言つた後での評判ひやうばんに、あまり腕が冴え過ぎて、どうも影で絲を引いて居たらしい人があつたといふ事だね、ほゝゝ、おキタさん、その旦那でせう、つまり好すいて好すか

いたづらもの

いたづらもの

れた人と楽しい苦勞の果に、めでたく添ひ遂げた御夫婦なんでせう、是非お伺ひ申したい事ね、ほゝゝゝ」

あの時、その後の事、實は我より問ひたさ聞きたさ山々なれど、これを問へば今の住居を問ひ返さるゝ身、これを聞けば良人の名もいはで叶はぬ身、たゞ此まゝ無事に別れても毒蟲に螫されし心地、うかとすれば鞘なき白刃を抱くが如しと、キタ女、そつと身を捻りながら胸帯の間より五圓紙幣二枚、紙に包みし手許を、ちらと眼早く見て、

「ほんたうに、御立派だ事ねエ、昔馴染のお心易立に、つい、うっかり、おキタさんだなぞと、ほゝゝゝ」

「あの、こればね、ほんの、失禮ですが、お菓子に」

「まア貴女、およしなさいよ、そんな事は、いゝえ戴いたも同前、おや、さうですか」

「其うち、私の方から一度、おたづね致しますから、千束町の、どちら」

「こたくくと這入り込んだ面倒なところですから、始めての方に、ちよいと分りませんですよ、それよりも千束町の二丁目で、髪結のお留といへば」

「いづれ、また」

慇懃に挨拶を残して、一圓の茶代と共に小婢を急がせ、其まゝ足早に山門の方へ、いなり／＼見返りて、

まゝならぬ世の中、同じ思はぬ不意の逢ふ瀬ならば、觀自在とやら此土は御佛の靈地、このキタに生れて顔も得しらぬ父母あるを哀れと思さずや、せめて行方の知れぬ伯父ならば、仲店の織るが如き群集雜踏も、何とやら果敢なき無常に淋しき心地、また雷門より電車に乗る前、小婢を振返りながら、

「折角、楽しんで来て汝、つまらなかつたねエ、あす一日お暇をあげるから、ゆつくり一人で、おいで」

いたづらもの

「案外、早く歸ッて來たね、どうだツたい、久しぶりで面白かつたらう」

「はい、賑かでは御坐いましたが、もう淺草なンかへは以後、決して、まゐりません」

「なぜ」

「何故でも、キタは全體、あゝいふ晴々とした、陽氣な混雜の中へ出るやうには、うまれ  
て居らないやうで御坐いますよ、やはり舊式に浮世の影で、淋しう暮らした方が、自分  
の性に合ッて居りますから」

「はゝゝ、妙に非觀したね、つまり馴れないからだよ、時に何か、おみやげは、神妙に留  
守番して居たぜ」

「おみやげ、はゝゝ大變な、おみやげが御坐いますよ」

「どういふ、みやげだ」

「ねエ良人、お留といふ女を、御存じて御坐いませう、髮結のお留、そら例の時、さんざ  
憎い邪魔を致しました、いやな女、あの時分、常にキタの髪を結ッて居りましてさ」

「むゝ彼女」

「あれに良人、逢ひましたの、不意に呼び止められましたね、まア、どんなに驚愕いたし  
ましたか」

「そいつア驚いたらう、しかし何事もなかつたかね」

「いろ／＼と變に、うるさく、からまつて來て、類に只今の住居や何かを聞かうと致しま  
したが、あゝいふ女には良人お金が第一の魔酔劑で御坐いますからね、兎も角も、その  
場を無事に逃げて歸りましたが、全く一時、どう仕ようかと思ツて、はゝゝ、キタの壽  
命は、たしかに一年を縮めました」

いたづらもの

いたづらもの

「うまくやツた、なアに六七年も経ツた今日、まして一點の疚しくないこツたから、たとひ、どんな事があつても大丈夫だがね、やはり面倒だ、は、は、は、久しぶりの娛樂が、ひどい淺草だツたなア」

「それに良人、彼女が淺草の千束町に、住んで居るさうで御坐いますから」

「赤い佛の堂の後に白首の鬼が住んでると聞いたが、そこで髮結といへば彼女、つまり鬼の角かくしを職業にしてるんだな、は、は、は、しかし考へて見ると、乃公と汝が新郎新婦の寫眞を並べて、出したくもないが新聞へ出るやうになれなかつただけ、互の運命に多少の波瀾があつて、戀と愛は遂げても、やはり人生に一の缺陷だ、どこへ放しても押しても立派に自慢の出来る汝を、かはいさうに、年に一度か二度、たま／＼の淺草で、あゝいふ女のため遁げて歸るやうにしたのは、乃公の罪だ、今日の淺草に限らず、どうしても乃公は汝の生涯に女一代の幾分を薄闇くしだやうだね」

「いくら世間に薄闇くツても、キタは、このキタは心の中で、あがるウク思ツて居ります」  
あはや涙に曇らむとせしを、心機一轉の廣行、

「第一、どこへ出ても汝は眼に立つから、いけないよ、も少し、わるくツても乃公は堪忍したに、は、は、は」

其 七

乃公は汝の生涯に女一代の幾分を薄闇くしたとの一言、キタ女の身に取りては、あらゆるかぎりの榮華を盡して世間萬人に羨まるゝよりも嬉しけれど、またこの良人に眼を曇らせて現在かくいばせしかと思へば、妻の身として腸を割かるゝよりも猶更ら辛し、

かはいさうに年に一度か二度、たま／＼の淺草で、あゝいふ女のため遁げ歸るやうにしたのも乃公の罪とは、勿體なや、年に一度か二度の淺草へ行かすとも、春の花、秋の月、君

いたづらもの

いたづらもの

たゞ一人を守りて夢さら／＼何の不足もない我身、あゝいふ女のため逃げ歸りしは、かう生れたる我身の不運、これを歎いて良人の罪とするキタと思召してか、

色を賣り肉を齧ぎて一時の虚榮に憧るゝ身ならば、たとひ心は闇くとも世に晴がましく孔雀のやうなる羽を伸して振舞へど、おもひし戀を遂げ情に包まれて生涯を楽しく送る身は、たとひ葉蔭に隠れて世は闇くとも人しれぬ心は晴れて静けき我身、女一代いつこの誰を見習うて誰にか疚しく誰にか恥づべき、

肥馬輕車を驅て交際場裡の夜會に招かれずとも、自動車を馳せて郊外春秋の花月を採らずとも、夜汽車の寢臺に夢を伴うて旅の空に都の香粉を誇すとも、この上野の森影に朝夕の塵を避け、この借家住居に衣食も足りて、この八疊と六疊の二階に身も狭からず人にも妨げられず、いつはりのない真心に、なり／＼は叱られ、隔てのない戯れに、なり／＼は笑はれ、うかつと事を仕損じて此女めと睨まるゝ時、おもひの外に譽められて汝なればこそといはる

ゝ時、その嬉しさ、その樂しさ、金殿玉樓の富貴にも代へ難く、世界の寶石を身に纏ふ榮華にも代へ難し、

もしこれを、古き道徳に囚はれしといへば、わざ／＼我に新らしき道徳を求めずとも、此まゝの境涯さらに何の不足もなし、もし過去の習慣に陥れりといへば、わざ／＼人に離されて立騒がすとも、我に將來の不安を來すべき恐れなし、たとひ舊思想に蔽はれても、新思想の自覺を叫ぶ用なく、たとひ生命に意義なしといはれても、これ以上の存在を認めらるゝ用なく、玩弄物といへば、玩弄物となるも恨まず、犠牲物といへば、犠牲物となる悔いす、涙脆く心弱く世に後れても、自然に出る涙を止めて世に先だつ希望なし、時代の思潮とやら、いかに我生涯を此まゝ踏み潰して過ぎ去るも口惜しからず、時代の要求とやら、いかに我運命を此まゝ餘所に振捨て、馳せ去るも口惜しからず、妻として良人に愛せらるゝ我身は、

いたづらもの

都大路の流行を競ふデパートメントに出入せずとも、演劇興行の美を争ふイルミネーションに照らされずとも、ダイヤの輝きルビーの光り眞珠の飾りに身を粧はずとも、神のみ知ろしめす我に人しれぬ幸福ありと思へば、

人に羨まれて人に誇り、世間に持て囃されて世間に騒がるよりは、人に知られず心に誇りて世間に騒がれぬ我身、いかに楽しきぞ、

晴れて世に立ち世に唄はれながら隠れて袖に涙を包むよりは、晴れて世に立たず世に唄はれずして隠れし袖に笑を包む我身、いかに嬉しきぞ、

家庭の圓滿といふ事を、さも難しげに教へ教へらるゝ人の哀れさよ、一夫一婦といふ事を、さも業々しげに問題とする人の氣の毒さよ、戀愛の神聖といふ事を、さも珍らしげに解釋する人の笑止さよ、

「ねエ良人、このキタは性來、かやうな行届かない不束なもので何一個、これといふ取得のない事は自分ながら、よウク承知いたじて居りますが、わけて其中で、どういふ事が第一の、疵で御坐いませう」

「だしぬけに妙な事をいふね」

「だしぬけでは御坐いません、絶えず常に、自分でさう思つて居りますから」

「は、は、まづ女としては、無疵な方だらうよ」

「さう良人、水臭く他事のやうに仰しやらずと、これが悪いとか、それが汝、いけないとか、はつきりと、深切に」

「また變に、をかした事を考へ出して來たよ、つまり善くないといへば汝、さういふ點が善くないぞ、乃公が何とも思つて居ないに」

「思つて居らツしやらなくツても、キタに悪いところのない筈は御坐いません」

いたづらもの

「まるで、言ひ掛りだね、はゝゝゝ」

「だって良人、さも蒼蠅く、面倒さうに、まア無疵な方だらうよ、それでは良人、さやうで御坐いますかと申上げられますまい」

「いよゝゝ喧嘩腰だ、はゝゝゝぢやア折角の御尋問だから、いふよ」

「はい、どういふ事が一番、わるう御坐います」

「まづ汝の一番、わるいところは、涙だ、自分で物を思ひ過ぎて、何か事があると、すぐに涙ぐんで、其まゝ黙ッて仕舞ふだらう、あれが汝、よくないれ」

「はゝゝゝ泣蟲が、いけませんの」

「泣蟲も聲をあげて、わあッと陽氣に泣き出すのは、或場合と或意味に寧ろ滑稽で、いゝがれ、汝のやうに、胸に迫ッた事を、じいッ堪へて、その張り切ッた眼に一ばい今にも落ちさうに溜めて居ながら、さて落しもせず流しもせず無言に唇端を噛み占めて、差俯く

だらう、あれが乃公のため實に一種の責め道具で、をりゝゝあれを遣られると乃公は閉口だよ、二の矢が繼げない、いくら怒ッて居ても腹が立ッても、何だか妙な氣になッて、刃向ふ事が出来ない、あの泣き工合は、汝の身に取ッて千人力だ、考へて見ると、つまり汝の涙管は眼に出るまでの間、頗る流通よく出来てるが、眼の邊に何か堰き止める障碍物があッて流れないんだな、いはゆる涙の淵瀬、あれが一時に流れ出せば、それこそ涙瀧の如しだ、はゝゝゝ」

「もうキタは何事も申しません、泣くにも世間普通の一人前、満足に泣けないやうなもので御坐いますから」

「おいゝゝ、さうでないよ、さう取ッては困る、天下萬人の涙よりも汝の眼に溜めた一滴に、強い力があるといふことだから」

「よろしう御坐います、強くッても、弱くッても、どうせ、御冗談の、お笑ひ草になるキ

いたづらもの

いたづらもの

タですから」

「さア、また喧嘩の出やうが違つて来たぞ、今日は汝、どうしたんだい、何事にも只、はいくといふ汝が今日に限つて、いち／＼擷まるぢやアないか」

「いち／＼キタが擷まるンで御坐いません、わざと良人が擷ませるやうになさるンです」

「おい、ちよいと此邊で休戦しよう、これぢやア實際がない、世の中に自分の善いと思つてる事を悪いといはれて怒る奴はあるが、自分の悪い事をいふてくれないため腹を立てる奴があるかい、は／＼」

「何事でも良人は、すぐ御冗談になさるからです、良人の一番お悪いのは、それで御坐いますよ」

「は／＼、今度は乃公の悪い方に廻つて来たね」

「全くで御坐います、どれが眞面目か、どれが冗談か、眞面目と冗談の境が、ごちや／＼

で少しも分りませんもの」

「は／＼ア、それが乃公の一番、わるいところだね」

「いえ、まだ外に澤山、御坐いますよ」

「まだ外に澤山あるウ、ついでだ、すツかり擧げて見る」

「あまり澤山で御坐いますから、控へ帳を出して見ませんと、ついでぐらゐでは逆も數へきれません」

「は／＼、つまり自分の悪い事を一個か二個、いはして置いて乃公の悪い事を、ウンと並べる筈だツたんだね、そんな顔をして居て汝は、なか／＼油断のならない腕があるよ、いはゆる寡を以て衆に敵するの策を得たりだ、危険、危険」

「は／＼、もし危険で策のあるやうなら、また少しは御用に立つ時も御坐いますが、つまり薬にも毒にもならない、あツても無くて、かまはないキタですから」

いたづらもの



いたづらもの

「どうして、どうして乃公のためには萬病これ一服の名薬だ、もし汝がなけりやアこの松川廣行、或は一代の放蕩兒になつたかも知れないぜ、汝といふ名花一輪があるから、いくら春めいても餘所の花見は仕なかつたよ、はゝゝゝ」

「こんな日蔭に咲き損うた草花よりも御遠慮なく立派に晴々とした、お花見を遊ばせば宜しいに、とんだまア、お妨げを致しました事」

「や、此ごろは汝、なか／＼うまくなつたね」

「何がで御坐います」

「何か知らないが、うまくなつたよ、的がなくつて此くらゐだもの、もし實際に的でもありやア、それこそ大變だ、どんな目に逢はされるか知れない、恐るべし恐るべし、はゝゝゝ」

「どうとも、お好きなやうに、お笑ひ遊ばせ」

「時に今夜ア散歩がてら、ぶら／＼上野の廣小路邊を歩かうと思つてるが汝、同伴に行かないか、いろ／＼と面白い露店が出てるぜ」

「さうで御坐いますか」

「困ツたなア、いよ／＼御機嫌を損じて仕舞ツた」

其 八

都下第一の高利貸、本所割下水の鬼幸、あけても暮れても手に放さぬ算盤を膝の上に突き立て、取るだけの利息を取りあげて足らぬところを證文に書き加へし後、さてと向き直りしが、向き直られし客は田島辯護士、法學士の肩書も法廷の才物も此奴の前では一文の價値なし、

「まア兎も角、これで田島さん、一段落は付きましたが今後、かういふ面倒な事は無いやういたづらもの

いたづらもの

に仕て下さい、第一また手数が多くて困りますよ」

「困るのは其方より此方だ、さう高利の拂った勘定残りを證書に書き加へて、その上また面倒だとか手数だとか、すきな不足をいはれるんだからな、は、は、は、世話アない」

「しかし田島さん、貴君の方で約束通りに仕ないから自然、かうなるんでさアね、かうならないやうに、すれば宜いぢやアありませんか」

「仕たいよ、いくら仕たくつても出来ないから仕方なしに已むを得ず、せっせと稼いで君等の土持をするのさ、考へて見ると長らくの間、神妙に運んだよ」

「は、は、は、わざく頼んで仕て貰ったやうですな、全體この頃の人には間違つてる、早い談話が親でも兄弟でもない無縁の他人に金を借りて怒るんだから、よほど儲からないと貸す方に割が悪い」

「あまり悪くもない筈だ」

「いや、よくもありませんぜ、骨の折れる事は一通りでなくつて、加之中には、随分、ひどい奴がありますからな、時に田島さん、ひどい奴といへば例の松川、彼奴、あれぎりですかね」

「あれぎりにも、なんにも、ありやア手に終へない、流石の僕も二度と再び盛り返す勇氣がないよ、ことしの二月、たしか三日だったね、うまく仕組んだ例の一件で、九分九厘まで首尾よく落ちて来たから、こいつ占めたと手形の裏書、いよいよ三千圓といふ段になつて吐す事が痛だ、君も運の悪い男だね、せめて一月か二月前に來りやア同じ級から出たんだもの、お易い御用だ何でもないに、遅かりし由良之助で判官殿、もう切腹して仕舞った、かかての廢嫡決定、明日から無資格無資産の丸裸一貫だ、もし置いてくれりやア君の支關番にでもなるよと、かうだ、おまけに、どツかへ圍つてある情婦の恍惚まで聞かされて歸つたが、ありやア無効だ、根が華族で無遠慮に馴れた上、人を馬鹿に

いたづらもの

いたづらもの

する調子があつて、づうづうしく度膽の太い奴だから煮ても焼いても食へない、うか／＼すると此方が三孟酸にして食はれさうだ、は／＼／＼しかし廢嫡は實際で、全く屋敷を出たといふこつたが、此間あつた我々の同窓會へも面を出さない、無論、最初から一度も出席した事のない奴でれ」

「田島さん、實ア其後、私が逢ひましたよ」

「どこで」

「千葉から歸りがけの、汽車の中で」

「そいつア面白かつた、君のこつたから、まさか其まゝ黙ツちやア置くまい」

「ところが、面白くありませんよ、此方より先に彼奴の方が黙ツて居ませんから、加之も狭い二等室で、ギツしりと詰ツた満員でせう、その中で野郎、だしぬけの大聲に、や、吐したも吐した、かりにも大名華族の種に生れた奴が、よくまア、あゝ毒々しい事を淀

まずと順序よく吐しやアがつたもんだ、もし汽車の中でなきやア年は取ツても私だ、あのまゝ無事に置く奴でない、去年の暮といひ、今度といひ、その以前この私を新聞の黒枠に入れて死んだ廣告した悪戯も、キツと彼奴に相違ありませんな」

「はゝア、よほど酷く、やられたね」

「酷いにも田島さん、物事は宜い加減といふ程度がありますよ、考へれば考へるほど残念で堪らない、思ひ出せば出すほど心外だ、少々の資本金をかけても彼奴だけは是非、復讐して見たい、誰か田島さん、彼奴の鼻ツ柱を捻ぢ上げる人間はありませんかね、五十錢や一圓の日常は出しますぜ」

「はゝゝゝ君が日常を出すといふくらゐだから、よく／＼のこつた、一通りや二通りの残念さでないれ、外の人の生命がけと同じ程度だ」

「冗談ぢやアない田島さん、全くだ、全く日常を出しますぜ」

いたづらもの

いたづらもの

「それほど残念で堪らなきやア、どうだれ勇を鼓して僕が、も一度、押掛けて見ようか」  
 「どういふ工合に、押掛けますな」

「僕の押掛ける工合より、君の僕に對する工合を、どうしてくれる、いくら貧乏しても、この田島ア五十錢や一圓の日常で動けないよ」

「ぢやア田島さん、思ひ切つて、かう仕ませう、もし貴君が押掛けて、うまく野郎を深水へ落とし込んだら、一月、空にする約束で」

「一月、空にする、どう空にする」

「どうつて、一月ですよ、今の勘定で書き直した元金八百五十圓の證書面でせう、その三月二割で百七十圓の一月分、つまり五十六圓六十六錢六厘、あとは切り捨てませう」

「は、は、は、かうなつても流石に君だ、實に恐れ入つた細かいもんだよ、しかし一月分の利足五十六圓六十何錢ぢやア動けないね、は、は、は、」

「さういふ田島さん、貴君は慾しらすだから困る、貴君だつて彼奴のため現に今年の二月、いはゞ手玉に取られて來た怨恨があるでせう、わざ／＼何も私のため頼れまるばかりでもない事に五十六圓六十六錢六厘といふ錢が、不意に儲かる仕事ぢやアありませんか、長年の取引上、おついでに無代で仕て下すつても宜い筈だ、どうです、イツそ無代で働いて貰へますまいか、その代り三個月の返済期限を文句なしの六箇月に延ばしませう」  
 「は、は、は、ますます手厳しいな、いや實はね、日常も入らない一月の利息も、まけてほしくないが、今度もし押掛けて、うまく彼奴に連帯さすとすりやア、幾何、貸せる、彼奴を今の境遇としてだよ」

「今の彼奴では、貸せませんよ、ありやア華族で子爵の相續人となつてゐる時の價值です、叩き出されて丸裸になつた以上、逆さに吊つて本人の鼻血くらぬ出るかも知れませんが、私の算盤からア三文も出ませんね」

いたづらもの

いたづらもの

「いや、さうでない、松川家は子爵中の第一で華族中の財産家だ、その長男として、どういふ工合に廢嫡されたか、よし廢嫡されたとしても、そこは君、世間普通たゞの家を追ひ出された馬鹿息子ぢやアないよ、第一また今日の境遇になつたのが寧ろ僕の乗すべき點で、なアに、まかり間違へば廢嫡されて居ても松川家の支關へ吐鳴り込む手段と方法は、いくらもあるさ、また今日の本人、どういふ生活状態か、それも實見した上で算盤に這入らないとも限るまい、兎も角も君に損をかけず僕の八百五十圓を元利もろとも彼奴に背負はして來て、たしかに取れるといふ證據を擧げてくりやア、よからう、どうだれ」

「なるほど、おもしろい、田島さん、それなら宜しい、それで野郎を、ぎゆう〜いほしてやりたい、考へて見ると廢嫡されても彼奴、元の友達で今日まだ交誼の好い華族の三人や五人、持つてるでせうから、さういふ奴に連帶さして、別に大きい口を二件三件、

やりたいもんですな、こりやア田島さん、貴君の分を彼奴に背負はせるだけぢやア聊か物足りない、うまく彼奴を乗せて、その外に大きく別口で、やるに限りますよ、は、は、は、」

「そろ〜慾の方が勝つて殘念な方を忘れて來たんぢやアないかれ」

「忘れはしません、もし面白い儲け口がありやア其間、ちよいと暫く殘念の方を中止しますね」

「殘念の中止は、よかつた、こいつア振つてる、は、は、は、」

## 其 九

ぶら〜と歩くにも、たゞぶら〜と動くのみでなく、その足を運び身を運ぶ生理上の運動以外、人しれぬ頭腦の中も何等かに向うて進みつゝ運び行く松川廣行、机の前に腕を組ん

いたづらもの

いたづらもの

で小首を捻るよりは、

また今日も例に依つて午後の散歩、ぐるりと池の端を巡りて東照宮の坂を上り、五重塔の此方に聊か草臥れし身をステツキに支へながら、エムシーを口に咬へて袂のマツチ、幾度か風に擦り損ふ折しも、

「松川さん」

呼ばれし聲は耳に入れど、慌て、振向きもせず、また二三本マツチの火を風に取りられ、やうく、蓑に煙を吹いて後、悠々と徐ろに見返れば、田島辯護士、はや眼前に近く小腰を屈めて、満面の微笑、

「先達は失禮しました、あれ以来の御無沙汰を、お詫び旁、實は明日お伺ひ致さうかと思つて居りましたところ」

「やア、あの時は僕の方が失敬でした、折角の御依頼を、しかし今ア番町に居ませんぜ」

「いや現今の御住居、承知して居ります、今朝お屋敷の方で聞きましたから」

「は、浪々の遣る瀬なさで、暫し浮世を忍ぶ假の宿といへば、いかにも洒落てるが實際なか、洒落どころでなく、いよく自分に働いて食ふとなりやア着堀い面倒なモンですな、時に田島君、わざとく來られるに及ばない、もし明日、何か用があれば幸ひ其用を歩きながら、今日こゝで聞きませうか、この上野を自己の庭園でも散歩してる氣で、は、は、は、」

「相變らず、潑刺として實に元氣なモンですな、しかし歩きながらは少々、あまり庭園が廣すぎますよ、は、は、は、」

「ちやア、どツか、茶店でも」

いへば此ま、思へば直に先立ちて、のそ／＼と歩み出し、わざと奥まりたる座敷建築の茶店に入らず、春の花に取残されて色の褪めし赤毛布の床几に腰うちかけ、

いたづらもの

いたづらもの

「田島君、こゝが宜い、どうです新緑の葉影、たまらないね、かうして地の上へ樹の間から漏れて来る日影の工合、何ともいへない心持だ、花よりも月よりも僕は春夏の交に最も愉快を感じるね」

うす汚き婆の持ち出す出がらしの澁茶を啜り、まだ残る葺の煙を心地よげに吹きながら、

「時に田島君、どういふ用です」

「かういふところで、お談話するのは甚だ何ですが、是非、御工夫を借りたい事が御坐いましたね」

「工夫、自分の一身上さへ、實は工夫に困つてゐる時ですよ、その僕へ工夫を借りたいは、聊か見當違ひぢやアありませんかね」

「いや、決して違はない心算で伺ひました、工夫は分量と程度の問題で、同じ困り方にも甲と乙の相違がありますから、さし當り田島の願ひたい工夫は無論、貴君の工夫を妨げ

るほどの事ではないと、考へましてね」

「はゝア、なるほど、さういふ意味ですか、つまり先達は金を借りに来て今日は工夫を借りに来たといふ理由ですね、よろしい、わかりました、あの時は生憎、あんな場合で奈何せん、金は折角の御依頼に應じられなかつたが、もし僕の頭腦で出る工夫なら御遠慮なく、ふんだんに使つて下さい、しかし自分の事に使ひ過ぎてゐる後だから、あまり宜い工夫が残つて居ますまいよ、失敬ながら、もし使ひ餘りで御用に立てばです、全體、どういふふこつてす」

「いはゆる滔々たる辯で、どうも貴君には一歩、いつも機先を制せらるゝやうな氣がして」

「はゝゝ、滔々たる辯は君の方が本職でせう」

「その本職が、やられますよ、はゝゝ、ところで外の人と違ひ、貴君に向つては寧ろ、露骨に要領だけ」

いたづらもの

いたづらもの

「露骨、要領、簡單、それに限りませんな」

「結局、お願ひする點は、やはり金に歸着しますが、しかし直接に金そのものではありません、つまり金を産み出すべき工夫で」

「さア直接でも間接でも、金といふ事になれば始と零で、いくら上手に使つても此奴、使ひ道のない人聞ですぜ、はゝゝそれとも君、もし金に對する廢物利用が出来れば寧ろ僕の方からその工夫を願ひたいもんだ」

「こりやア恐れ入った、金に對して人間の廢物利用は實に警句だ、はゝゝしかし其處が分量と程度で、貴君ア自分に廢物と思つて居られても、この田島から見れば、決して、どうして、廢物どころですか、なかゝゝまだ立派に通用しますよ」

「お世辭は止して田島君、この松川まだ金に對して、全然これ廢物でないとすれば、つまり、どのくらゐの信用があるでせうな」

「そりやア貴君、一萬でも二萬でも、貴君の御工夫と御決心次第です」

「ところで、君の僕を利用する額は、どのくらゐです」

「なアに、ほんの僅で、さし當り二千圓もあれば目下、大に助かります」

「なるほど、僕に一二萬の工夫が出来て、その僕に要求する君の必要が差當り二千圓とすれば、何でもない、まづ一割だ」

「さうです、わづか、その一割に殆ど苦心慘憺を極めて居りますよ」

「そりやア氣の毒だ、ぢやア田島君、どうです、僕は君のため幾何でも利用されるから、まづ僕に二萬圓の出来る工夫をして下さい、もし二萬圓、出来れば其三割、二三の六千圓を君に呈しませう、失敬だが手数料として、また僕も不意に一萬四千圓、懐中へ遣入れば當分、樂だ、先達は君、かういふ工夫も何もなくて、只あゝいふ場合に金を借せと迫るから無理だよ、あの時だつて今日のやうに君、うまく僕を利用して出来るやうにす

いたづらもの



いたづらもの

れば出来たかも知れない、考へりやア君よりも寧ろ僕の方が残念だッだ」

「いかにも、さうでしたなア」

「あまり君が自個本位で来たからさ、やはり世の中は相手も助けて自分も助かるといふ、いはゆる雙互關係の利益上より誠實に割り出した工夫でないと無効だ、いけない」

「全くです、は、は、は、時に今いふ二萬圓の工夫ですが、誰か、外に、相當の人が御坐いますまいか」

「外に相當の人間とは、僕の外に君、まだ人が入るんですか」

「つまり貴君の連帶者で、以前の御朋友か何か」

「や、君、ちよいと待ッた、それぢやア談話が違ッてる、僕は僕一人で二萬圓の金が出来るもンと思ッて居たから、その手数料として君にも六千圓を出すと言ッたが、わざわざ外に人を頼ンでまで僕ア金を作りたくない、第一また連帶といへば證文を書いて借金す

いたづらもの

るこッたらう、は、は、は、それは君、工夫でも智恵でも手柄でも何でも無い、貸す貸さないは借置いて世間普通、いやしくも金を借りようとする奴の一般に誰でも考へる藝當だよ、は、は、は、大變な勢ひで眞面目に仔細らしく工夫工夫といふから、どんな神算鬼謀かと思ッたに、やはり借金の意味だッたんだね、なあんだ馬鹿々々しい、元の友達を義理詰の連帶者にして高利の金を借るぐらゐの事は田島君、わざわざ君に教へられなくッても承知してるさ、しかし松川廣行、金を借りるに他人の信用まで借りて金と人との二重借なンかア斷じて仕ない、この理論からいふと僕に對する君は三重借り四重借りを目的にして來た人間だ、よくないねエ、加之も君、借金は金のない奴が苦しませに、すべきもんでない、金のある奴が、何等かの事業上、その足らざるを借りるもんだ、のみならず返す的のない借金は詐欺取財で、約束の期限を過ぎても道徳上に於ける一種の犯罪だ、や、うかく、饒舌ッた、この邊は君の講釋する領分だッたね、は、は、は、兎も角も君、

いたづらもの

金を借りる事は一切、御免を蒙らう、また君も僅千や二千の端金で凌げるやうな苦勞なら、寧ろ金で凌がすに努力奮闘して凌いだ方が宜からう、借りた金を返すのは、働いて儲けるより一倍の力が入るといふコツた、もし借りもせず働きもせずに出来る工夫があれば君、その時こそ教へに来てくれ給へ、田島君これで失敬するよ、生憎散歩の途中を引き止められたから持合はせがない、この茶代を君、たのみますぜ」

すツと其まゝ後も見返らず、のそくと立去れば、取残されし田島辯護士の呆れ顔、眼は白黒に面は赤くなり蒼くなりて、

十二三間の先にて俄に立停りし廣行、こゝで振返るかと思へば、吸ひさりし衰の火を新らしき衰にうつして、また其まゝ歩み出だしぬ、

初音町への近道あれど、時間の割合に運動の足らざりしか、わざと博物館の前より動物園の横に出でし時、彼方より來かゝる一人の男、いはゆる破帽弊衣の語を遺憾なく實際に現

はして、加之も病後の落魄、みる影もなき書生體、道を避けて行き過ぎむとするを、すれ違ひに振返りし廣行、

「やア君、安藤君ぢやアないか」

すツと立寄れば、顔も得あげず、居縮むが如くに差俯いて、

「松川君ですな」

「どうしたんだい君は、久しく逢はンれエ、二年までは同級だツたが、急に半途で去ツて仕舞ツたから」

「生意氣に妙な考へから、途中で學問を捨てたのが、やはり悪かつたんですな」

「はゝア、何か事業でも、やり損ツたんだれ君」

「なアに事業の失敗だけなら、かうも酷く、なりませんがね、つまり放蕩の結果ですよ、さんざ馬鹿を盡した自業自得で、いはゞ當然の成行ですから、舊知の人々に對しても、

いたづらもの

いたづらもの

汗顔の至りとか面目ないとかいふ程度を越して仕舞って、今ぢやア哀を乞ふ資格もありませぬ」

落ぶれた奴にかぎりて、その落ぶれた理由に一種の申譯を加へ、さも不足らしく不平らしく愚痴を滾す筈なれど、たゞ自業自得の結果として當然の成行とせし一言、却って面白く氣に入りし廣行、すつと差寄りて、

「君、病氣もあるやうだね」

「多少、脚氣のやうな點もありますが、大體は、營養不十分からですよ」

「今ア君、どこに居て、何をして、食ッてる」

「そこまで聞くのは、聊か残酷ですなア、此まゝ別れさして下さい」

「いや、きくだけの考へがあつて聞くんだよ君、しかし残酷だから止してくれば面白い、ぢやア是以上、押して聞くまい、時に安藤君、ちよいと其處まで僕と同伴に来てくれ、

遠くない、つい近くだ、初音町まで」

「どういふ用です」

「まア何でも宜い、来るさ」

其まゝ手首を掴まんばかりに伴うて、我家の門口、五六間の此方に待たせ、急ぎ足に駆け込みしが、すぐに再び飛び出して、紙に包みしものを安藤の懐中へ捻ぢ込みぬ、

「黙ッて君、取ッて置いてくれ、決して君を侮辱する意味ぢやアないぜ、實は僕も廢嫡されてね、あれが今の住居だ、しかし君は現在の境遇を一轉して兎も角その落魄を脱し得るまで、たづねて來ない君と信じて此まゝ別れる、もし今日の君が一錢五厘を費して端書の禮狀でも、よこすやうぢやア無効だぞ、しツかり、やれよ君、だが身體は大事にするが宜い、器を丈夫にして置かないと、さアといふ時に物を入れる事が出來ないからね」

いたづらもの

いたづらもの

「良人まア、何で御坐いますの、五十圓も、今あの人に」

「汝、見て居たのかい」

「さア出せ、そら出せと、あまり變ですもの、ちよいと二階から」

「安心したらう、女でなくツて、はゝゝありやアね、學校時代の友達で、あゝなツた奴に出逢ツたからよ、さう以前は親しくも交はらなかつたが、なかゝ面白點のある奴だ、彼奴あのまゝで凹垂れまい、どうかなるだらう」

「まことに結構な事では御坐いますが、これから良人、さう度々あゝいふ人をお連れ遊ばしては困りますよ、只今の御身分で一口に五十圓といふお金は、ねエ良人、おわかりで御坐いませう」

「わかッてる、わかッてる」

「しかし、今の人は嘘、嬉しう御坐いましたらうね、あゝいふ風俗をなすツてるンですも

の」

「だから考へて見ると、安いもンだよ」

「いくら良人お安くても、この後は、いけまんよ」

「はいく、かしこまりました」

## 其 十

度すべからざる不孝の子も、行末を案じらるゝ不肖の子も、世間の他人には知られぬ涙の親心、

まして有餘る財産と名譽の家に不肖ならぬ子を持ちて、その子また不孝ならざるに家を去り産を嗣がざる親心、なほさら世間の他人に知られぬ涙深し、

加之も其子の妻なるもの、しツとり睡れる如く靜なる中に物事の疎からぬところあり、い

いたづらもの

いたづらもの

ぢらしく打沈める哀れの中に心の雄々しきところあり、天然の容貌さらに畫ける如き風情、どこに一點の瑕瑾なき珠玉とすれば、この夫婦を家の外に置いて朝夕に見られぬ親心、老の寢覺にも忘らるべきや、

香町の屋敷に奥深く老の身を持ちて餘せし松川子爵、急に座を立ち手を叩いて、

「これ、誰か居るかな」

廊下を通りかゝりし三太夫、障子を開けて闕際に、

「は、何か御用で」

「乃公は今日、これから出るよ」

「お馬車を」

「いや、歩いて行く」

「いづれへ、お供を申し付けます」

「供はいらないが少々、金が入る、出してくれ」

「お徒歩では、あまり、また金子は、いかほどで、どういふ事に御入用で御坐いますか、一應」

「どういふことでも乃公が入るから、五百圓」

「は、五百圓、もし御買物でも御坐いますれば、猶更ら、お供を」

「うるさいな、五百圓、出せんか、出せなければ宜い」

ことし六十の坂を越せし老の身は、今日なほ残る昔の大名氣質、疊ざはり荒く其まゝ座敷を出でむとする勢ひに、三太夫、はッと驚いて脚下に平伏、

「御前、暫く、只今、すぐに」

いたづらもの

いたづらもの

「出すなら早く出せ早く、時間がある」

大名の家に九太夫は禁物ながら、三太夫こゝに三人、内々そつと額を鳩めての評議、

「どうも近來、御様子か變つて、まぬりましたぞ」

「さやう、なり／＼お徒歩で不意に何處へ、お越しになりますかな」

「わけて今日の様子は、我々に於て此まゝでは相済みませんな、外様は兎も角、御當家に限つて一切これまで金錢上に、おたづさはりなかつたのが急に、さも待遠に仰せられて五百圓」

「事に依ると、或は、例の、初音町へでも」

「や、たしかに方角は、あたりましたな、それでなくて、どうも御自身あゝ不意に急な御

入用のある筈は御坐いませんな、いよくさうとすれば、御親子の間柄、萬々お察しは申し上げても、お家に取つて將來、甚だ掛念に堪へません、第一また御相續人となられた御次男様に對しても、お互我々の落度に相成りませう」

「全くの儀で、これは此まゝに置けません、加之も御總領が、あの通りの御氣質で、お家柄も何も捨て、飛び出されるやうな方ですから、猶更ら以て、うかと思出来ませんよ、それに御前が萬事あゝいふ大様に在らせられて、その上また身分も素性も知れない女が居るとすれば、ます／＼容易ならん次第で、今後、いかやうな大事が起らないにも限りませんからな」

「過日、郵便の張紙に書いて出した山村キタといふ、その女が第一、曲物かも知れませんぞ、まづ御總領を首尾よく引き付けて置いて、また更に御前を呼び寄せるといふ手段で事を巧む下種女には、得てよくある業ですからな」

いたづらもの

いたづらもの

「いや、そのみでなく、さういふ女には必ず影に、わるい附き物があつて、いろ／＼と糸を引きますから、うかくすれば御親子もろとも、大變な事になりませう」

「つまるところ、その女が災禍の基ですな、何とか致して其女を退ける方法は、ないものでせうか」

「いや、お待ちなさい、急いでは却つて事を仕損じますから、ゆる／＼お互に御相談いたして、兎も角も、其女を退治ませう」

あはれ花の露に月の宿れる如きキタ女も、三太夫どもの口の端にかけられては、退治さるべき化物扱ひなり、

門口に俥の停まりし梅棒の音、つゞいて戸を開け、内に入りし足音、

をりしも老少の下女に手の放されぬ用を言ひ付けしキタ女、みづから出で、見れば、父の廣道、にこやかに、

「また来たよ」

「おや」

無量の尊敬も、無量の有難さも嬉しさも、只この一言に盡きしが生憎、廣行は二階に午睡の夢、隣席の六疊はあれど八疊の座敷一個、良人を起せば父を待たせ、父を通せば良人を起されず、内憂外患、一時に迫るが如き苦しき、例の太く濃き眉を寄せて、いよ／＼張りきる目元に上下を見ながら赧らむ顔、

「どうか暫時、とり散らして居ります」

かけ上りて良人の耳に口、

「お父様、お父様ですよ良人」

いたづらもの

いたづらもの

ゆり起す間もなく抱き起されて、流石の廣行も聊か狼狽の體、坊主枕を抱へながら鄰席の六疊へ遁げ込めば、キタ女、あとに残りし毛布を突き入れて襖を閉て切り、また下に降りて跪き、

「お待たせ申しあげて、恐れ入ります」

父の廣通、満面に溢るゝばかりの微笑を浮べながら、人しれず忍び來れば猶更ら思ひ増し、これ以上の望みも楽しみもない心地に眼を細らながら、

「今日は廣行、居るかな」

「はい、只今」

座を迂りて板間より鄰席へ、出違ひに良人の背後、そつと羽織の襟を折り直せば、見向きもせず其まゝの廣行、父には今年の上野に花以來の今日が始めて、

「お父様、御機嫌よろしう御坐います、度々お越し下さいましたが、いつも生憎不在で、

何とも申譯、御坐いません」

「はゝゝゝつい、かうして、ちよいくと來るやうになつたよ、ところで、汝も達者だね」

「有難う御坐います、身體だけは、御覽の通り、相變らず、ますく壯健で」

「えゝこれで乃公は四度、來たね、三度とも汝は居らないが、しかし妻は萬事に優しく行届いたもので、汝の分まで勤めてくれるから、いつも氣持よく歸る」

「幸福もので御坐います、おいキタ、お茶を」

「いやゝゝ、さう急ぐに及ばん、今日はね、ゆるゝとして、何か夕飯を、汝達に御馳走して貰ひたい、俵を歸さう、九段から乗ッて來たよ」

キタ女、鄰席より無言のまゝ降りて、門口に待てる車夫の値を聞き、いふがまゝに取らせて再び上り來りぬ、

いたづらもの



いたづらもの

「お傳、歸しまして御坐います」

さらに聲を潜めて、

「良人、御夕飯と仰せられまして」

「むむ、何か汝、考へてね」

「この邊の、お料理では逆も、お口に」

「さうでないよ、お父様は汝に何か、せよといはれるんだ、妻は、ちよいと手料理も致します」

「あら良人」

「は、その手料理が宜い、外から一品も取ってはいけないよ、ありあはず食物で、汝達と同一に喫べよう、は、愉快だね」

「どう致しませう、茶器を良人に託し、この一言を残して其まゝ下に降り行きしキタ女、臺

所に入りて、裾を引き上げ、白き前掛と褌を手に持ちながら、思はず小首を傾け、さアいよく世話女房の大役、時も時、わけて折あしく、きのふ今日は近來にない大不流、二階には久しぶりの父子、互に膝と膝とは離れても、自然の血は通うて心と心の打解けし物語、

「廣行、當分まだ此まゝ何もせず、居るかね」

「いや、實は、お父様、この廣行、かうして居りましても、決して頭腦の中は、遊んで居りません」

「その邊は、乃公も知ツて居るが、やはり氣になる」

「相濟みませんが、こゝ暫時で御坐います」

「しかし全體、どういふ考へで、何をする覺悟だね」

「はい、お父様に對して別段、祕すべき事も道理も御坐いませんが、御先祖以來の名門にいたづらもの

いたづらもの

生れて、不肖ながら、じつとさへして居れば長男で立たる、答の身分を、わざと好んで今日、かういふ境涯になりました廣行は、たゞ華族といふ名譽と體面に縛られる窮窟を脱れて我まゝを仕たいためでは御坐いません」

「それは、わかッてるよ」

「今日のところは只、この點だけ、おわかり下さいまして、それ以上は、お父様、どうかもう暫時、いづれ近い將來に於て、具體的に申し上げる覺悟で御坐います、廢嫡されて家を出ても、松川家の子たるに愧ぢないだけの事は、廣行、きつと御覽に入れます、第一また恐れ多くも皇室の藩屏たる華族には、その仕事の上に華族を去るべき理由のある廣行よりは、陛下の軍人たる弟の廣國が當然の主人となる答のもので御坐いませう、この點からも松川家は、長男を廢して次男を立てた事に何物の議論を挿む餘地が御坐いませう、お父様、華族は人生の最も單純にして加之も最も高潔なる職にあるものが嗣ぐべ

き答で、廣行の如き複雑の社會に何等か自個主義を行はんとする人間は、寧ろ華族そのもの、權威と安泰とを損ずる恐れがあります」

「なるほど、さういへば、さうだれ」

「ですから、お父様、兄の廣行が去つて弟の廣國が相續する松川家は、華族として最も立派な意味を明白にして居ります、さらに廣行が他の方面で、もし幸ひに生れた家を辱めないだけの仕事をすれば、兄弟おのゝく相分れて、その所を得てゐるでは御坐いませんか、たゞ廣行は今も申し上げました通り、何をするか、具體的に御覽を願へるまで、この暫時の間、此まゝお見遣し下さいませうやう」

「よし、それで猶よくわかッた」

「ところで、お父様、思召しは幾重にも有難う御坐いますが、屋敷の者どもは、かやうな理由も何もなく只、お家大切に存じて居りますから、既に廢嫡した廣行の借屋住居へ、

いたづらもの

いたづらもの

かう度々お越しになりましたは、却ッて」

「それは、かまはン、乃公の勝手だよ」

「無論、さうで御坐いますが、やはり常分の間、第一お父様のため、また過日はキタに、いろくおみやげを下さしまして、あゝいふ事は猶更ら」

「それでは乃公に今後、こゝへ来るなといふのか、來ては迷惑になるのかね」

「いえ、決して、困りましたなア、お父様」

「もし汝が面倒なら汝に逢はなくても宜い、妻に逢ひに来る、妻は乃公の氣に入ツたよ、廣行、もし妻を粗末にすると乃公が承知しないぞ」

廣行、厠に立つが如く無言のまゝ會釋して其場を遁げ出し、今や臺所に一所懸命の妻が傍「おい／＼まだか、急いで早く出せよ、どうも乃公は、いカン、汝に限る、うまく始めは話し込んで居たがね、ちよいと機嫌を損じた」

「あら、どう遊ばしたンですよ、キタは今これですもの、まだ手が放されません」

「なアに飯は後でも宜いから汝、ちよいと顔を出せ、どうも乃公なンかと違ッて道中の行列時代に生れた阿父だからね、わかッてるやうで、をり／＼困る事があるよ、は／＼／＼兎も角も汝が出ればすぐに直る」

襷を外し前掛を取り裾を引き下して、鬢の毛を撫で上げながら、靜に沁り入る額越し、

「只今、御夕飯を差上げますが、此お料理人、甚だ不手際で御坐いますから迎も、お召抱へになりますまいと存じます、は／＼／＼」

才色の外、溫情の外、これが俗に相性といふものか、父の廣道、音なき春風に誘はるゝ心地、

「は／＼／＼いろく厄介をかけるね、心配は入らないよ、廣行、どこへ行ツた、彼奴、乃公の來るのを迷惑らしく」

いたづらもの

いたづらもの

「まア、勿體ない事を、御意に觸りましたところはキタが萬々、おわび致します」

「乃公にさへ、あれだから、汝には定めし無理な事をいふだらうな、さういふ時は遠慮なく叱ツてやらんと、いけない、第一、くせになる」

「では、すぐに今お叱り申してまゐります、ほゝゝ」

「はゝゝ、叱ツてやれ、叱ツてやれ」

今日のキタ女は上と下との大役、身一個を千々に碎いて、また臺所へ駆け入れれば、

「どうだ、すぐに直ツたらう、前世は、汝の家來筋で忠義の盡しやうが足らなかつたんだね」

「御冗談ぢや御坐いませんよ、折角あゝして入らツしやるのを良人、何と御心得あそばすの迷惑さうに」

「こりやア遣り切れない、上下の夾撃だ、はゝゝゝ」

今日だけは汝達、わたしを助けておくれよといふ優しき言葉の下に、三人の下女を隙間なく諸方へ走らせ、時は五月の季節、筍、露、蕨、ほそれ大根、鶯菜、この五品を膳に整へ、一切の魚類を避けて差出だしぬ、

茶の心得はキタ女に取りて第一の藝、自然に會席の手筋ありて、まづ父の前、良人の前、その身は亭主役を兼ねた給仕人、廣道、一目ちらと膳部を見て、

「これは、なか〜お手際、うれしい御馳走だれ」

「まことに、不加減で御坐います」

「どこやら不味公の倂がある」

「恐れ入ります、良人、お招伴あそばせ」

「廣行、いろ〜心得のある妻だれ」

「ところが、お父様、廣行には、いつも出來損ひのフライとかライスカレーとか、いやにいたづらもの

いたづらもの

「バタ臭いものばかりで、かういふものを食はしてくれません」

父子夫婦もろとも三人、おもはず聲を揃へて、どツと一時に笑ひ出しぬ、

金屏風の内に生れて、儀式めいたる家風に育ち、ことし六十の坂を越ゆるまで出入ともに

函詰の如き身が、我子の假住居に誰憚らず打寛ぎ、優しく哀れげの妻に心づくしの夕餐を

給仕され、かゝる事は始めての廣道、箸を取りながら三人ともに思はず笑ひ崩れし楽しさ、

うか／＼すれば父も屋敷を出で子爵を捨て、此まゝ此家の舅になつた氣なり、

夕餐も終りて、食後の茶も濟みし後、廣行、頻に軒端より空を見上げながら、

「お父様、もう遅くなりませよ」

「汝は黙ッて居れ、乃公は歸る時に歸る」

「ですがね、屋敷で、また心配いたしませう」

廣行に見向きもせず、キタ女に向うて微笑を浮べ、

「今日は、忙しい目をさしたれ、今度、來る時は何處か外で、乃公の方が御馳走しようね」

「はい、ありがたく、お供を致します」

「少し東京を離れて、どこか景色の好い料理屋があれば、考へて置いてくれ」

そろ／＼市外へ遠出の氣、夫婦おもはず眼と眼を合はせど、それを唯一の楽しみに我身を起せし父、

「近來にない、ゆツくりとしたよ、では歸る、汝は廣行そのまゝに居れ、妻が送ッてくれる」

わざと我子を其場に置いて、送り出だせしキタ女を振返りながら、そツと一封の紙包、例の五百圓、

「廣行にいふな、これはね、汝に何か買ッてやりたいが、乃公に、わからないから」

戻しても取る筈なく、たゞ無言に泣いて押戴き、門口まで送り出だすや否、忽ち引返していたづらもの

いたづらもの

二階へ駆け上り、

「今日は良人お見送り遊ばせ、いゝえ、もう御機嫌は直ッて居ります、お屋敷の御近處まで、暮れますかられ」

前後二臺の俵を飛して番町の角まで父を送り届け、その身の歸途は電車、ぶら／＼と白山前より歩みて、歸り來りしは夜の七時過ぎ、

廣行、我家の門口に近けば、頻に二階を見上げ階下の入口を左覗く宵闇の人影黒く動いてづか／＼と不意に進み寄るや否、はッと驚いて逃げ出す途端、慌て、小石に躓きしが、ぱたりと倒れし上より押へ付け、びしやりと隻手のステツキに打たれぬが此奴の僥倖、

「こらッ、きさまア何だ」

「は、恐れ入ります、どうか」

「おヤッ、杉浦ぢやアないか」

「は、は」

「何しに來た、まさか廢嫡の乃公に御機嫌うかゞひでもなからう」

其まゝ引き起せど、肩口を掴みし手は放さず、普通の若殿様でない實は自慢の腕力、

「まア兎も角も家へ這入れ、番茶でも飲ますよ」

「いづれ、あらためて、伺ひます、どうか此まゝ」

「いや、放さない、折角こゝまで來て、きさま、さういふ挨拶があるか、是非とも這入れ」

さらに大喝一聲、

「來いッ」

何事かと耳を澄ませしキタ女、今の大聲に驚いて駆け出し、

いたづらもの

いたづらもの

「良人、どうなさいましたの」

「今ね、乃公が歸つて來ると此奴が門口に、うろくして居たから取ッ捕へた、こりやア屋敷の家來で杉浦といふ奴だよ、こら這入れ」

無理に引きすり込まれて二階へ押し上げられ、顔へながら片隅に居縮めば、冷かなる微笑を浮べし廣行、

「おい杉浦、きさま、世間しらすの小さい古い頭腦で、をかしく妙に變な忠義立を考へ出しちやア、いかに、すべて世の中が廣く大きくなつて、今日は昔の大名でない、たゞ華族といふだけのこつた」

「は、は」

「たとひ昔のまゝの大名にしたところで、まだ杉浦、幸ひ松川家には、きさまが夜、人の家を窺ツたり覘ツたりして忠義立するやうな、お家騒動も何もないぞ」

「は、は」

「はツ／＼とばかり言はずに何とか返答せい、全體、今ころ乃公の家を、きさま、どういふ理由で、どういふ必要があつて窺ツた、竊盜に來たとも思はないから安心して、ありのまゝに言へ」

「は、申し上げます、實は、御前が、もし、お越しではなからうかと存じまして、内々、お迎ひ、かた／＼」

「どうせ、さういふだらうな、は／＼、お父様が今日こゝへ來られたのは來られたが、内内お迎ひ、そりやア嘘だ、は／＼、お迎ひに來る奴が馬車も俥も廻さずに、きさま一人が何のため内々お迎ひに來るんだ、第一また身を忍んで猫が肴を取るやうに、あの闇がりで、あんな、お迎ひがあるかい」

「ひらに、何卒、ひらに重々、御わびを申し上げます」

いたづらもの

いたづらもの

「きさまの考へは、わかッてる、わかッてるが今この乃公は黙ッてるから、あまり見當違ひに立騒がないやう今後、よく氣を付けろ」

「は、は」

「いくら父子の情愛で、お父様が來られてもね、もはや一旦、家に對して廢嫡の廣行は、家のため自分のため決して屋敷へ再び用がないから、よけいな心配するな、おいキタ、ちよいと來てくれ」

わざと階下に差控へしキタ女、呼ばれて入り來りぬ、

「杉浦、それが乃公の妻だ、お父様にも度々お目にかゝッて、いろ／＼御親切にして貰ッてるよ」

化物退治の發頭人は此杉浦、逆さまに生捕られて恐縮の額越し、おそろ／＼見れば瞬眩き絶世の美人、加之も自然に氣高く品位あれど、少しも高ぶらぬ慇懃の挨拶、

「初めて、御意を得ます、キタと申しまする不束もの」

「は、は、これは、は、これは、は」

「まア貴君、お羽織の袖が砂だらけに」

砂だらけの筈なり、門口に捻ぢ伏せられて其まゝ引きすり込まれし杉浦、背を拂ひ袖を拂はれて、ますます恐縮の體、優しく白き手も鬼の鐵棒に打たるゝ心地、さりとして遁げ廻れず、いよ／＼居縮んで頬に兩手を宙に振りながら、

「これは奥さま、どうか、此まゝお捨て置きを、は、は」

廣行、笑ひながら糞の煙を吹いて、

「おい杉浦、夕飯を食ツたか、まだなら出してやるぞ、どうだい」

「は、いたゞきまして御坐います」

「こゝへ來る途中で食ツたのか」

いたづらもの



いたづらもの

「いえ、お屋敷で」

「は、ア、食ふ事は忘れずに食ッて来たんだな」

ぎゅうぐいばされて、五十面に背汗を流し、やうぐ遁げ歸る出口までキタ女に送られ、ひよろしくしながら、

「奥様、どうか宜しく、おわびを」

### 其十一

帝大出身の同窓會員中、あまり名聲噴々たらず従うて事件も多からざる辯護士連の七八人、

ゆうへ池の端の待合に夜討をかけて、おのゝ敵の女武者を歸せし今朝、宿酔いまだ醒めざる朝酒に、今夜またいづれへか戦場を變へて再び出陣の評議、

「まづ今日は日曜で、お互に勉強したくツても出来ない日だ、ぼんやり此ま、暮らしちやア策が無さ過ぎる、どうだ諸君、おもしろい考へは絞れないかね」

「只これ兵站部の一事だよ、武器も戦闘力も充分、あり餘ッてるがね」

「は、あり餘ッてるから困るんだ、しかし此ま、脾肉の歎に了るのも残念だな」

「や、諸君、名案あり名案名案、頗る名案がある」

「折角だが君の名案と君の原告に、いまだ替て功を奏した凡例がない、いつも被告側に功を奏して遺憾なく服従の義務を盡してゐるから、は、は、は、」

「ところが今日の名案は忽ち言行一致の名案だ、知らずや諸君、この池の端の近くに我々のため豊富なる兵站部があるぜ」

「はてね、どういふ理由だ」

「こりやア近ごろ田島に聞いたんだが、例の松川廣行ね、あれが居るよ、彼奴、華族といいたづらもの

いたづらもの

ふばかりでなく、學校時代から妙に超然主義を取って、其くせ不意に、をり／＼惡戯けた真似をする奴だツたが、どうしたのか近來、廢嫡されて初音町に住んでるさうだ、加之も君、見遁すべからざる事が二件ある、その一は彼、我々と同じ級から出て五年の今日まで、いまだ一度も同窓會へ面を出した事がない、但し會費だけ送ってくるのが生意氣千萬だ、癪に障るぢやアないか、さらに他の一件は、けしからんで、たとひ華族は止めても此女ばかりは止められないと、誰に向つても大びらに惚けるほどの女があつてね現在その女と同棲に、うき世の風は何處に吹くといふ調子に暮らしてゐるさうだ、過日、久しぶりで田島が逢つた時も、のろけ交りに誇大妄想狂のやうな怪氣焰を吐いて、我々この同窓會を罵倒するに、ありやア世の中に狼狽へて集まつたどうしよう會だと吐いたさうで、田島ア僕に眼を剝いて憤慨して居たよ」

「そりやア聞き捨てにならんぞ、初音町の何番地だ」

「番地は聞かなかつたが、なアに直ぐ分るだらう、たしか山村とかいふ女名前だと言つた」

「おもしろい、その罰金に引ツ張り出して、ウンと奢らしてやらう、我々八人で包圍すりやア遁さない、いくら彼奴だツて、まゐるよ、この中で誰か使者に立たないか」

「いや、わざわざ使者を立てるより俾で迎ひにやる方が宜いね、手紙を持たして」

「手紙は、無効だ、いけない、遁げるにも、断るにも自由だから」

「たゞ手紙ぢやア無論、無効だよ、しかし我々八人の連名で、もし來られなければ押掛けて行くといふ文意さ、ね、さういふ女と小意氣に洒落てる中だ、押掛けられて堪らないから嫌でも、やつて來る、來れば占めたり、もう此方のもんで、袋の鼠、釜中の魚だ、はゝゝゝ」

「決定決定、それに決定した」

「さし當ツて書記は誰だ」

いたづらもの

いたづらもの

「書記は酷いが、この中での文章家は僕だよ、この通り考へなくツても筆を執れば、さら／＼と巻紙に音するばかりで、かういふ工風だ、早いだらう」

「なるほど筆は早いが、意味は通じてるかね」

「黙ッて、黙ッて、さア出来た、此まゝでも宜いが念のため一應、勸進帳で読み上げるよ、

拜啓、爾來久敷御無音に打過ぎ候へども時下ますます御清適の段を承知いたし候と共に

庇ながら艶福の御近状また羨望の至りに不堪候、ついでには我々八人こゝに小宴を相催し

候間萬障御縁合せ御來臨下され間敷哉、もし外出御差支御坐候はゞ、我々當方より打

揃ひ拜趨可仕候、どうだ、うまからう、もし外出御差支といふところは前の艶福云々

々に照應して、全文の骨子こゝにありだ、我ながら名文だな」

「はゝゝゝあまり名文でもないが、まアそれで宜いとして、すぐ車夫に持たしてやらう」

「しかし置きツ放しては、いけないぜ、その俾へ本人すぐに乗ツて來ないとすれば、兎も

角も返事を取ツてくるやうにね」

「無論だ、ところで、どういふ返事が來るだらう、面白けれ、こりやア愉快だ」

池の端より初音町まで車夫の脚に往復の時間、三十分も要せず歸り來りしが、果して空俚

されど女中の取次ぎし返書に、八人おもはず膝を乗り出して見れば、洋紙にペン先の走り

書、

久々にて諸君の御手紙を拜見いたし候、早速推參の筈ながら元來の大下戸は、却ツて折

角の御酒宴に座興を破るべく候、また打揃うて御尊來の節は目下の借屋住居に二階下四

疊半の客室と御承知下されたく候、但し久瀧の友情その後の高説も承りたく候間もし御

晝飯の席を小生に御任し下され候はゞいづれか他に御用意可申上候、折返し御返事ま

入候

八人の内、三四人は思はず互に顔を見合はせ、あとは我しらす腕を組んで首を捻りながら、

いたづらもの

いたづらもの

「どうだい、この返事は、何だか妙に此方が、やられたやうな気がするぜ」

「つまり下戸だから酒の場に行かない、もし八人で来るなら来て宜いが四疊半へ押込むぞ、しかし晝飯なら奢ってやらうといふんだ」

「加之も折返して、すぐに返事しろは、けしからんれ」

「かまはない、やけど、八人で四疊半へ坐り込んでやらうぢやないか」

「此方は這り込んでやツた覺悟でも、向うは押込んで覺悟で居るよ、第一それで食はず飲まずに奴の氣焔を聞かされたり、ちら／＼女の影を見せられたりして、たまるかれ、は／＼病氣になるぜ」

「全くだ、警察で拘留せられた方が寧ろ優勝だ、あきらめが付くよ」

「しかし何とか返事を仕ないと、此ま／＼ぢやア敵の逆襲をうけて凹垂れたやうなものだ、斃蛇に驚いて尻餅を搦いたと一般だぜ」

「いッそ彼奴のいふ通り、どツかで、うんと贅澤な晝飯でも奢らしてやらうか」

「残念ながら僕なンかア昨夜以來の酒びたりで、この二日酔に、さうは食へないよ、もし彼奴のこツたから意地わるく、こて／＼と眼前へ洋食でも出されちやア、殆ど責苦だ、むか／＼して嘔くれ」

「おい文章家、つまり君の名文が失敗の基だぜ、久しぶりて舊情を暖めたいとか何とか敬意的に先の遁れツこないやうに書けば宜いものを、我々八人／＼に酒を飲ンでるとか、つまらない艶福云々と外出云々の照應なンかするから無効だよ、現在この返事を睨んで八人が腕を組んだ工合、よほど先の方が名文だぜ」

「味方の同士討は禁物だ、名文争ひは措置いて、さし當り多數決で返事することに極めよう」

「どう極める、返事の遅くなるだけでも彼奴に内兜を見透かされる理由だ」

いたづらもの

いたづらもの

「かうなると、考へるほどいけないよ、上策は策なしで、ざつくばらんに現ナマの無心でも吹ツかけてやらうか、露骨に、むきだしに、昨夜からの勘定が足らないから幸ひ近くの君に一時の立替を頼むとれ、どうだらう、一人で真面目に金の事は面白くないが、八人かう揃つて待合の勘定だけに却つて罪がなく聞えるぢやアないか」

「寧ろ天真爛漫で、それも宜いが、彼奴また天真爛漫に、はつきりと未練なく断つて來た時は、どうする、いよく拙いぜ」

「さう君、消極的に考へ込んぢやア我々八人、謝罪に行くより仕方ないぜ、はゝゝゝ」

「兎も角も百圓、ぶツかけろ」

「賛成賛成、しかし今度は文章家の名文、無効だ、僕が書く、書く前に諸君の同意を得て置くが、まづ、かういふ文句で宜からう、委細は拜眉の上、さし當り金百圓、我々八人の馬鹿遊びに不足を告げ候一時御立替下され間敷哉、どうだ」

「よからう、ぐづぐづいはないで、委細拜眉の上は簡にして明なりだ、まさか來る事も出來ない金もないといへまいよ、現に晝飯を奢るといふくらぬだからな」

また車夫を初音町へ走らせれば、額を鳩めし八人の相談と違ひ、一人の即決即答、すぐに來りし返事は、同じ洋紙のペン筆、

百圓の金子は何時にても御坐候間御安心なさるべく候、但し委細拜眉の上と御坐候故お目にかゝりて御渡し可申上候」

八人また一本まゐられた顔色、

「いかんれ君、簡にして明なりと思つたが、やはり委細拜眉の上が悪かつたよ、かうなれば仕方ない、誰か拜眉に出掛けて來るんだな」

「百圓の一人占なら隨分、拜眉に出掛けるが、八人等分ぢやア出掛ける奴が、つまらない」  
「書いた本人が拜眉の責任あるだらう」

いたづらもの

いたづらもの

「いや、豫め諸君の同意を得て書いたぞ」

「圖引圖引」

「なアに、もう意地だ、野郎、我々を馬鹿にしてるところがあるよ、今更ら後へ引けないぞ、出来ても出来なくつても構はない、うるさく絶えず此處と初音町の間を往來して魂くらべに手紙と返事の取りツコをするんだ、もし先も意地で夜になりやア猶更ら面白い、此方の城は夜あかしの待合家業で敵は素人家だ、まして好きな女と早く寝たい宵からの戸締りを、ドン／＼割れるやうに叩き起すんだ、は／＼／＼あらためて歴ツ節の達者な車夫を一晝夜、抱へ込まうぢやないか」

「やるべし、やるべし、數に於ても一人と八人が／＼りだ」

「と、こゝろで早速、今度は、どう書いてやらう」

折しも階下より女中の取次、みれば初音町よりとして、今までの洋紙とは封筒までも違ひ

し状袋、

「おや、来たぜ」

「来たらしいね」

「流石に何とか、考へ直したんだらう」

「そりやア君、いくら彼奴だつて、我々／＼に八人も酒の勢ひだもの、考へ直すよ、どうせ叶はないと思つて、急に封入して来たんだな、は／＼／＼」

「かはいさうに、罪だつたね、兎も角、すぐに禮状の一本も出してやらうぢやないか」

「實は此方だつて、この上、意地になりたくなかつたよ、公平の眼で見れば曲直いづれにありと問ふに及ばないんだからね、は／＼／＼」

その一封を開けば、なるほど洋紙のペン先と違ひ巻紙の筆太に墨くろく、

只今の御手紙うかと致して、我々八人馬鹿遊びの勘定不足といふ一節を讀み落し候、折

いたづらもの

いたづらもの

角ながら今日の境遇いまだ諸君の馬鹿遊びに應ずべき馬鹿金の用意これなく候間あらためて断然おことわり申上候、金も他人の馬鹿尻を拭うて有餘るほどになりたきものと大に奮發心を起し候

あつといふ聲も出ず、たゞ茫然として八人の呆れ顔、されど此まゝ無言の呆れ顔を並べても居られぬ場合、

「畜生、ふざけ過ぎた事をする奴だ、どうだい、この文句は、同じ断るにも始めの一度で済む事を、わざと前後二度に割つて入念に來やアがツたぜ、我々八人も揃つて彼奴一人のため、こゝまで翻弄されりやア澤山だ」

「もはや悪戯でない、喧嘩を買はれてるんだぞ」

「喧嘩となりやア諸君、手紙や文句より單刀直入、その覺悟で掛らうぢやアないか」

「だから始めに僕の説が一番だ、四疊半でも三疊でも、この八人で押掛けて坐り込むに限

るよ」

「や、待ツた、いよゝゝ喧嘩となれば、猶更ら多勢が一時に押掛けて、うかゝ乗リ込めんぞ、彼奴も法律の頭腦だからな」

「實に残念だな、いちゝ機先を制せられて仕舞ツた」

「諸君、兎も角も僕に一任し給へ、これから彼奴を訪うて直接、僕が解決を付けて來よう、此まゝぢやア引くに引かれず進むに進めず全く我々の立場がない、彼奴だつて行掛り上かうなツたもの、まさか心持よく思つては居ないさ」

「しかし君、我々の意地を没し體面を損じてまで、屈辱な和睦は出來ンぞ」

「大丈夫、うまく行けば、笑つて連れて來るよ」

全權委員の一人、いかにも心算あるが如く、自己の胸を叩いて降りしが、門口より俥の駈け出せし音もなく、また元の二階へ上り來りて一種異様の妙な面、

いたづらもの

いたづらもの

「どうした君、まだ行かないのか」

「おい諸君、怒ッて宜いか喜ンで宜いか、逆も叶はないよ、僕が今この下へ降りて行くと  
ね、女將が出合頭に只今この御勘定が濟みましたといふから、ふしぎに思ッて聞くと諸  
君、やられた、やられた、昨夜からの總計六十七圓幾何といふところへ百圓紙幣一枚を  
置いて、あとは茶代だ、もし二階で彼是いへば金は其まゝ預ッて置いて別に二階から貰  
へと、さう言ッて今そこへ出たさうだ、松川奴、そッと階下まで來やアがッたんだ、障  
子を開ける開ける、まだ其邊を歩いてるのかも知れない」

二階の障子を開けて見れば、一目に池の端の二十間あまり先を、のそりくと歩む廣行、  
振返りて帽子に手をかけながら、

「やア失敬」

八人おもはず我を忘れし會釋の面を並べて、一時に押へ付けられた形狀、これが百圓の生  
きた玩弄具とは、廣行の心中、物價騰貴の今日に天下の至廉なり、

### 其十三

今日は何處へか、まだ歸らぬ良人を待ちわび我身の用もなくて、夕ぐれ近き門口に立出で  
しキタ女、

みどりの若葉、いつしか上野の森に濃く茂りて、その隙間より暮れ行く空の紅き横雲に射  
られ、我しらす照り返さるゝ美人の顔、大理石の名作に薄紅を刷けるが如く、ますく際  
立ちて冴え渡りぬ、

酒は煮物の酒鹽と味淋の外に用なけれど、味噌醬油を重に出入の酒屋小僧、にこくと十  
四五の愛嬌もの、三升徳利を提げて前を通りながら、小腰を屈めし途端、物に追はれしか  
横合の垣根より犬に飛び出され、はッと驚く脚下、ひよろくと前に倒れかゝりし溝石の

いたづらもの



いたづらもの

角、叩き付けたる如く徳利は微塵に割れて、加之も小僧は俯せしまゝ、両手に固く足の拇指を掴みぬ、

キタ女、おもはず駈け寄りて、

「どうかしたの」

「割ッちまひました」

「いゝえ、お酒よりも足を、どうかして」

「へエ、足なシか、どうしても宜うがすが御注文の三升、たゞ大變な事をしました」

「あら、血が出てるよ、まアおいで此方へ」

手を放せば生爪を剥ぎし黒血に、キタ女は眼を睜りながら臺所へ連れ込み、二階より葡萄酒を持ち來りて疵口に注げば、下女も小僧も一時の驚愕、

「まア奥さま勿體ない」

「水で洗ひます水で、へエ」

「さうでない、これで洗ッて置くと直に宜くなるよ、汝そこの手拭でも割いておやり、かはいさうに、まア痛からうね」

小僧の身として冥加に餘れど、實は足の痛みより注文の酒三升到半泣きの澁面、

「あの、お酒は何處かの注文だったのかね」

「へエ、この横町へ、とんだ事をしました」

「家へ歸ッて困るだらうからね、あれば當家で取ッた事にしてあげるよ、門を通りが、りに呼び込まれたから置いて來たと言ッて、すぐまた注文の分を持ち出せば宜いだらう」

「おゝ奥さん、あり、有難う御坐います、家の旦那ア殿しくッて、私は去年、廣島から來たばかりのもんで、どうしようかと思ッて居ましたので、奥さん有難う御坐います」

この小僧、半泣きの嬉しさに、廣島といへる一語は、人しれぬ異様の音響を傳へて、キタ

いたづらもの

いたづらもの  
女の耳に針を刺すが如く聞えぬ、

縁日の露店に賣る草花さへ、どこに生れて何の種といふ事は知らるゝ筈を、淺ましや人と  
しての我身、いづこに生れて誰の種に育ちしやら、  
まして戸籍といふものゝある今日、その戸籍も秋の木葉に等しく、吹く風に舞はされ弄ば  
れて、たづぬる始めは何處の梢より散りしやら、  
むかしの小説にこそあれど、今の世の中に我身ほど果敢なき運命のあるべきや、  
おぼろげながら遠州流の生花の師匠、それが子ども心に育てられし養父母、をりく手土  
産をさげて訪ひ來し伯父といふ人の、一家を擧げて廣島へ行きし時は、やうく九歳の春、  
せめて十一二でもあれば、袖に縫り人に隠れて生みの父母いづこにありと聞しものを、十

三の秋、また養父母に死に別れ、その親類に引き取られしより十七の曉まで三たび他人の  
家に移され、いふにいはいはれぬ數々の苦勞、泣くにも泣けぬ様々の憂き目、十八の春を鬼の眼  
に睨まれ、蛇の口に視はれて、恥かしき浮世の闇に墮ちむとせしを、神か佛か、救はれし  
は今の良人、

救はれしのみか、その後の五年六年、人しれぬ影に手を持ち添へて導かれ、誰れ知らぬ間  
に、師を選びて教へられ、果は富貴の臺を捨て、まで我身に情の露、女としての冥加に餘  
れど、人としての不運は只これ我身の素性、いかなる父に生まれ、いかなる母に生まれ  
しか、

今の世に我身の生れし素情も知らぬもの、いづこの山の奥にも谷の底にもあるべきぞ、  
野原の末の草の葉蔭に流るゝ水も、添うて歩めば源泉のある筈、手を盡して戸籍の移り來  
りし筋を傳へば、もしやと思ふ希望はあれど、傳ふ道に山あり巖あり鬼も蛇も棲みて、ま

いたづらもの

いたづらもの

だ四五年は此まゝに、山村キタといふ別戸の女、うかく松川といふ姓にも願へぬ身、今の我身に血筋の縁といへば、九歳の春に別れて、これさへ生死の知れぬ伯父たゞ一人、その伯父を幼心に廣島と聞きしのみ、十餘年の今日まで文字に見る外、世に交はらねば絶えて人にも聞かざりし此耳へ、あの酒屋の小僧、廣島生れとは、まだ番町より通ひ來ませる時の事、すぎし冬の夜寒の歸るさに、乗り給ひし辻傳を小川庄藏と聞きし時、はつと嬉しく悲しく伯父の名と思ひしに、あかの他人、小説や演劇の通りに巡り逢へないぞと笑はれしが、あの小僧、せめて今度は小説の端であれかし、遠くとも我身の縁に繋がる演劇のやうであれかし、廣島、廣島、なつかしや、

朝の七時ごろ、二階に良人の食事を濟ませて、それとなく臺所口に心待ちのキタ女、

例の小僧、例の聲に御用はと差覗くや否、餌を貰ひし猿の如く、びよこくと頭を下げて、

「奥さん、きのふは有難う御坐います、へエ、おかげさまで、へエ」

「とんだ事だつたね、足は痛まないかい」

「へエ、何とも御坐いません」

「よかつたね、時に小僧さん、汝、廣島だと、おひいだね」

「へエ、廣島から去年、まわりましたので」

「何といふ名」

「庄吉と申します」

伯父の名は小川庄藏、おもはず胸を突かるゝ如く徹へしが、下女の手前、今の我身、わざと静に、

「庄吉といふの、苗字は」

いたづらもの

いたづらもの

「へエ、小川で」

はッと思ひし時、二階に手の鳴る音、

その翌日、また朝の御用といふ聲に、キタ女、わざと表の入口に待ちつけて、勝手口より出る小僧を招きながら、

「小僧さん、汝、お父さんあるかれ」

「へエ、奉公に來たのは去年ですが、四年前に阿父と同伴に、廣島から、まゐりまして」

「お父さん、何といふ名」

「庄藏と申します」

「え、庄藏、小川庄藏だね、今、どこに居るの」

「千住の、三輪新町に居ります」

「何をして」

「へエ、つまらない事を、いたして居ります」

「つまらない事、どういふ事なの」

「へエ、屑屋で」

「おや、まア、そうかい、おツ母さんあつて」

「御坐いません、阿父だけで」

「お父さん、ことし幾歳になるれ」

「奥さん、どういふもんで、さう、お聞きになりますンです、阿爺は今年、五十七、いや八ですが」

「きのふ、あんな酷い怪我をしても休まず、さうして跛を曳きながら、れエ、かはいさうに思つて、聞いて見たの、よく奉公、おしよ」

「へエ、有難う御坐います、奥さん、この十五日は、また手前の店の競争で、お得意先かいたづらもの

ら小僧の御用を誰が一番多いか、旦那に褒美を貰へる日ですから、どうか奥さん、どツさり御用を」

「あゝ宜いとも、宜いとも、汝をきツと一番にしてあげやう、いくらでも、いふだけ取つてあげるかられ」

もしこれが世の中に只一人の血を繋ぎし我身の伯父とすれば、さまざまの家業あるべき屑屋とは、その子は正しく我身の従弟に當りて、酒屋の小僧とは、

なほ委しく聞きたし、聞きたくもなし、いかなる人か、餘所ながら見たし、見たくもなし、しみじみ逢うて父母の事、知りたし、また知りたくもなし、

恥かしくとも打明けて良人にいへば、いかに卑しくとも淺ましくとも、それがため我身を

捨て給ふ良人でなし、されど良人の耳には入れたくなし、まして猶更ら影も形も見せたくなし、

あの小僧にあの上の事を聞いて、もし間違へば何とせむ、兎も角も千住の三輪新町とやら尋ねたく思へど、いつはりて出るに心苦しく、また白晝に問ひ歩くも今の身は、さりとして夜に入れば、夜に入りて一入の謹むべき身、

語る人なし、頼む人なし、夜は深く涙に濡るゝ枕紙、もの思ふ身に夢も結ばぬ寢覺勝、ひゞく上野の鐘の音は我運命の絲を引くかと怪しまれて、

ひよこりと勝手口に首を出せし小僧、どこやら滑稽じみて憎氣のない顔、飯炊婆の背後より、

いたづらもの

「婆アやさん、けふは十五日で、どうか御用を」

「お味噌も酒鹽も、まだあるよ」

「奥さん、見えませんな」

「奥さん、奥さんて、この小僧、ちよいと深切にして戴けば宜いかと思つて、奥様が何、汝に御用あるもんかね」

「だつて奥さんに今日、お願いして置いた事が」

「お臺所は私だよ」

「ちやア歸りに、また伺ひませう」

「うるさいね、入らないよ」

「困つたなア、どこへ往つても、あんな好い奥さんはないよ、奥さん入らつしやらないんですか奥さん」

「大きな聲で、何だね、づうぐしい」

きのふ今日、わけて、耳に立つ聲、そつと身は静なれど心急ぎに二階より降りて臺所口、

「奥様、いませんよ、この小僧、あまりお優しく遊ばすから此奴、すぐに貴女かうで御坐います、お友達か何かのやうに、大きな聲で奥様奥様ツて」

「ほゝゝさう言ツてやるもんでないよ」

首だけの小僧、ぬつと身體を入れて、頭を掻きながら、

「へエ、今日は十五日で、へエ」

「おゝさうだつたね、あの、お醤油は大きな樽で、お煮物の味淋もついでだから、澤山ね、奈良漬あるの、あれば七八本ね、お味噌、もし悪くならなければ半月分でも一月分でもそして汝の家に雑詰も、いろくあるさうだね、蟹と鮭と時雨蛤もあるかね」

「まア奥様、さう一時に、どう遊ばすんです」

いたづらもの

いたづらもの

「どうせ無駄にならないから、取ッておやりよ、けふは十五日で小僧さん、御褒美になるんださうだ」

わざと洗ひ物の水を蹴れられて、つるりと顔を手に撫でながら、鬼の首でも取ッた勢ひ、一足飛に飛び出す後影を、キタ女、じつと見送りて、

人しれぬ涙は袖に包みかれ、堪への思ひは身に餘りて、夕餐の済みし後、たゞ一人、そつと初音町を出でぬ、

すまぬ事ながら、歸れば良人の膝に泣いて取纏る心、つい二三町の其邊を散歩として、

いふがまゝの値に俵を飛ばして上野のステーション前、電車の監督に教へられて千住大橋行に乗り、こゝを三輪と車掌に聞いて降りぬ、

下谷の場末、その日の夕暮、荷馬も荷車も歸路を急ぐ千住街道の砂埃、低き軒を並べし木賃宿の掛行燈、これを一蓮託生の疇として四方より集まる日傭ひ日稼ぎの労働者、眼前の露命を繋ぐ飯屋、一日の凱歌を奏する馬肉屋、夢うつゝの瞬間に舌鼓を打つ居酒屋、大地に襤褸を積んで賣り往來に魚類の腸を賣る夜商人、朦々たるカンテラの煤煙、紛々たる汚物の臭氣、一文二文を争うて血の出るほどに掴み合ふ喧嘩口論、うす闇きところ、に赤裸の女を追ひ廻して喚き叫ぶ聲、一種の餓鬼道に等しく、現代的の地獄圖に似たり、この中にキタ女の立姿、

いはゆる塵埃溜に鶴の降りたといふよりも、さらに一入の不似合なる背景を極めて、殆ど人生の殘酷に近く、いかに奇想天外の美術家も、この美人の中に立たすだけの運命を弄ぶ勇氣なかるべし、

銀座街頭にさへ歩を停めて振返らるゝキタ女、今この場末の夕暮に織るが如き貧民窟の出

いたづらもの

いたづらもの

盛り時、ふしぎの眼の欲て、前後左右より打守られ、中には近寄りて顔を差覗く奴、わざと摺れ違ひに突き當る奴、そつと手を握りて行き過ぎる奴、今更ら遁げられもせず助けも呼べず人にも問へず、うろくししながら、やうく交番所を見付け出すや否、急いで足早に馳け出しぬ。

「ちよいと伺ひます、あの、三輪の新町に、小川庄藏と申すもの、御坐いませうか」  
 巡査も訝しげの眉を寄せ眼を光らして、じろく見ながら、

「番地は何番地です」

「はい、それが」

「番地が知れないと困りますね、この邊は貴女この通り、なか／＼面倒な混み入ったところですから實は番地が分つて居ても、人間が居るか居らないか分らないくらゐです、全體どういふ用で」

「はい、あの、私どもの、下女に来て居りましたもの、親で、是非、たづねたい事が御坐いますから、この邊まで、まゐりました、ついでに」

「は、ア、さうですか、小川庄藏、何をしてる人間です」

「たしか、屑屋を致して居りますさうで」

「屑屋、や、屑屋なら分りませう、お待ちなさい、調べてあげませう、つい其處に古い同業の者が居ます、それで分らなければ問屋といふものがありますから」

こゝも俄の人集りを追ひ拂うて、交番所より四五軒先の門口を差覗きながら、

「おい、小川庄藏といふ屑屋はないかね、何、ある、どこだ、天王裏の長屋に」  
 振返りて差招き、

「小川庄藏、あるさうです、これから先に天王様といふ神社の前を、左へ這入った長屋の奥で」

いたづらもの



いたづらもの

「有難う御坐いますが、いかゞで御坐いませう、お禮を致しますから此家の方を一人、御案内に願へますまいか」

風俗言語、一目に見て取りて阿爺に尻を突かれし十五六の小娘、これも女のうちかと思はるゝ見苦しさ、

「旦那、わたしが案内しませう」

「よからう、貴女これに随いて行けば、すぐ知れます」

巡査に腰を屈め、小娘の後に随ひ、脇目も觸らず差俯いて急ぎ行けば、突き當りし天王社を左の薄闇き路に入り、また右に折れて泥溝添を二度目の左へ曲りし裏長屋、此まゝ放されては白晝さへ出口に迷ふべし、

「あの、あなたね、その小川庄藏といふ屑屋さん、御存じ」

「知つてます、よく家へ來ますから」

五十錢銀貨一枚、そつと手に握らせて、

「どうかね、きいて見て下さいな、元は神田の明神下で乾物屋をして居た人で、十年あまり前に廣島へ行つて、四年ほど前また東京へ來た人でないか、とね」

ちよこくと小走りに駆け入りしが、やがて奥より一人の足音を伴ひ來りぬ、

いかな場末も電燈の世の中に、まだこゝは五分心のランプ時代、棟割長屋の兩側より破れ戸を漏るゝ光り薄く、やうく脚下を照らして、空の星明りに腫げの顔貌、しかと見えねどぶんと匂ふ臭氣に近きし老爺、中腰に透かしながら黴枯れた聲、

「お前さんですか、小川庄藏、わたしです、へエ、元は神田の明神下で乾物屋、長らく廣島に居りましたが全體お前さん、どなたです」

轟く胸を押詰めて、わざと餘所々々しく、

「あなた、キタといふ、姪を持つて居なさいませんか」

いたづらもの

いたづらもの

「キタ、キタといふ一人の姪は御坐いますよ、ある處へ養女に遣りまして九歳の時、別れたツきりで實は、わたしの方でも、さんざ探しましたので」

闇なればこそ、そこに其まゝ仆るゝばかりのキタ女、じつと身を支へ足を踏み占め、はらくと流るゝ兩眼の涙、拭ひも得せず、うち震ふ手を胸帯の間より取出だせし一封の手紙、  
「その　そのキタといふ人に、たのまれて、まわりましたもので、これを、お渡し致します、いづれ本人が明日か、明後日、お伺ひすると、いふ事で御坐いますから」

「へエ、其キタは今、どこに居ります何處に、お前さん、お宅は、どちらで、まア兎も角お這入り下さい、いろゝお尋ねしたい事が」

「いえ、急ぎますから、その手紙に住所も書いて御坐いますし、きつと本人が、また本人が必ず、まわりませうから、これで、これで」

其まゝ足早に引き返して、あとより追ひ来る小娘に聲もかけず、幸ひ迷ひもせず元の天王

前に走せ出づるや否、また運よく空俵に出逢うて、

「いくらでも上げる、上野まで上野まで、急いでね」

慌て、俵に乗りながら、振返れば、小娘のみと思ひの外、今の人、これが現在の伯父、十餘年來の今宵、ちらと見る眼の襤褸姿に、おもはず顔を反けて、

交番所の前を過ぎ去る時、見られねど車上の目禮、金杉通りを眞一文字に馳せつゝ上野までの間に、どれほどの涙が出たやら、上野よりまた外の俵に乗りて、初音町まで夢路を辿る心地、

## 其十三

つい二三町、その邊までの散歩といひしに、二時間あまりを費して、やうゝ我家に歸りしキタ女、

いたづらもの

いたづらもの

たとひ二三町だけの時間にせよ、いつはらぬ氣、あとで打明す心、まして其まゝ二時間あまりを費せしのみか、これほどの嬉しき悲しき、いかに見苦しくとも、いかに恥かしくとも、世に連添ふ良人の前、袖に餘りて流るゝ涙を包まるべきや、胸に餘りて堪へぬ思ひを隠さるべきや、

現在の伯父に逢ひし時さへ、闇に涙は流せど聲も立てざりしキタ女、歸りて良人の顔を見るや否、其まゝ身を打伏して、わつと泣きぬ、

「おい、昨夜はキタ、この乃公まで泣かしたぜ、兎も角も今日その酒屋の小僧を呼んで、かまはない、こゝへ伯父を呼びに遣れよ、さういふ身分ぢやア定めし來るにも困るだらうから幾何か、金を持たしてね」

「はい、實は、昨晚、逢ひました節、手紙に、決して、お名前も、住所も知らしては御坐いませんが、たゞ姪のキタといふ事だけ、書いた中へ、二十圓」

「よく氣が付いた、出るにも差當り著物に困るからな、あゝいふところに住んで、さういふ事をしてるものは」

「さやうに、存じまして」

「しかし、ふしぎだな、いよく今度こそ全くの小説になつたよ、すぐ呼びにやれ」

「いゝえ、それではキタが、苦しう御坐います、どうか半日ばかり、お暇を」

「どうする、そんなところへ汝、この白晝、もし汝が行くなら寧ろ乃公が出掛けてやらうか」

「あら、まア良人」

「なアに乃公は却つて、さういふところが面白いんだ、好奇心でなく、實は兼て自分に入  
いたづらもの

いたづらもの

の知らない一種の趣味と考へを持つてゐるんだよ、屑屋でも泥溝浚ひでも犬殺しでも、さらに頓著なした、しかし外の事と違つて、やはり乃公の出ない方が宜いね、また汝も行く事は止して、呼びに遣れ、呼びに

「はい、どツか、上野の、茶店へでも、呼びまして」

「ぢやア今日のところ、まアさうして置いて、また乃公が何とか仕てやらう、一人の伯父だ、長らくの間、泣いて居る親の事も、これで分るんだからね、實のところ口には出さないが、乃公も知りたかつたよ、昔と違つて今日の世の中に自分の妻を産んだ親が、わからないといふ事は、忍び難い苦痛で、つまり人間の恥辱だからね、まづ目出たい、めでたい」

料理屋その他の人目を憚りて、わざと上野の淋しき茶店の奥を選び、正しく従弟に當る例の小僧をと思へど、また思ひ返して、我顔しらぬ車夫を使ひに、たゞ昨夜の手紙にある本人との一言を添へて、

本人に頼まれし手紙と受取れば、あれが本人の姪、今の境涯に二十圓は大金なれど、所住も知らさぬ恨めしさに、ゆうべ一夜を睡らざりし伯父、今日また不意に本人よりの迎ひをうけて、殆ど狂氣の如くなりぬ、

すぐに迎ひの車夫と其まゝ伴うて來られぬ身、五圓紙幣四枚の内、まづ一枚を屑屋の親方に預けて、木綿ながら垢つかぬ著物と羽織を借り出し、茫々たる頭髪を刈り髻を剃り、湯に飛び込んで新らしき下駄、入らざる千住名物の焼鯛を手土産に携へ、絶えず眼に見ても見送るばかりの電車へ今日は勢ひよく飛び乗りぬ、

幾度も念を押して聞きし上野の茶店、きよろく見廻しながら入り來るを、それと待ち兼

いたづらもの